

水の文化

特集

釣りの美学

— 静寂と興奮の狭間で

水の文化 June 2018 No.

59



水惑星との交信

作家 東京経済大学教授 大岡 玲

ひとしずく



いきなりネガティブなことを書く
ようだが、釣りという遊びには、「う
しろめたさ」がつきまとう。少なく
とも、私の場合はそうだ。どこがう
しろめたいのかというと、まず釣り
が生きものを相手にする遊びだ、と
いう点。漁を生業にしているのなら
いざしらず、一時の快樂のために魚
をだまして捕まえてしまおうとい
うのだから、真面目に必死に水中で生
きている相手してみれば迷惑千万
な話ではないか。

いや、いじめは魚に対するものだけ
ではない。生き餌を使う方式では、
魚が好むゴカイやミミズといった生
き物を鉤に刺し、もがき苦しむのも
顧みず、錘おもりとともに水中へどぶん。
残酷ここに極まれり。

そんなにいけない趣味だというな
ら、さつさとゴルフにでもくら替え
すればいいではないか。そんなお声
がかかるのは必定である。だが、し
かし、ううむ、やっぱりどうしても
やめたくないのである。なぜなら、
魚がかかった瞬間の、あのまばゆく
輝く恍惚、いや時に恍惚という言葉
をはるかに凌駕するほど真っ白に
「空白」になる、あの感覚を知ってし
まっている今、それなしで暮らして
いくのはきわめてむずかしいからな
のだ。それは、いささかおおげさだ
が、「地球に触れる」、というような感
じなのである。

さほど器用でもない指先を使い、
なんとか羽アリのような形に仕上げ
た毛鉤はねかぎに、水面を割って巨大な鱈が
食らいつく瞬間、いつもの時空とは
異なる場所への回路が開く。糸の彼
方であばれる生きものの震え、波打
つ水の重さを介して、私と美しき水





毛鉤に食いつき、あばれるイワナ。欺かれたことに気づき、危機を脱しようともがく命の手ごたえが釣り人たちを魅了する

の惑星・地球が瞬時つながる。この惑星の脈打つ体液の中で生きる魚の命を通じて、私もまた地球と交信することが可能になるのだ。その時、自然と私とをへだてる膜が消え去り、自分の体内の細胞の衰える流れがふっと止まって、腐食しないすべすべの物質に刷新されたような気分になる。

だが、それは一瞬のまぼろしに過ぎない。水際で喘ぐ鱒の口から鉤をはずし、そっと流れに戻す。いくぶん力を取り戻した魚影が、水の深みに姿を消した途端、地球からの通信は途絶える。そして、またうっすら濁ったおなじみの時空が戻ってくるのである。

きっと、釣り以外の趣味でも、たとえ山登りなどをする人には、きつと似たような「つながる」感覚があるのではないかと思う。電流がながれ、ほんのまばたきするほどの間、地球と合体できる。よるべなく覚束なく生きている感覚から、ほんの少し離脱することができる。私が釣りという暴虐を愛するのは、そういう幸福感を手にできるからなのだ。そして、その幸福感が一瞬であるからこそ、またいつそいいとおしく感じるのである。

大岡 玲（おおおか あきら）

1958年（昭和33）東京都生まれ。東京外国語大学外国学部イタリヤ語学科卒業。同大学大学院外国語研究科修了。1987年『緑なす眠りの丘を』で作家デビュー。1989年『黄昏のストーム・シーディング』で三島由紀夫賞を受賞。1990年『表層生活』で第102回芥川賞を受賞。2006年から東京経済大学教授。2012年に開高健、井伏鱒二、坂口安吾、山本周五郎など日本の文豪14人が描いた釣りと旅の作品の舞台を、自ら釣竿片手に巡り歩いた『文豪たちの釣旅』（フライの雑誌社）を上梓。



特集

釣りの美学

——静寂と興奮の狭間で

古来、釣りは趣味として、またはスポーツとして親しまれてきた。例えば1653年に出版されたIzaak Waltonの『The Compleat Angler』（邦題『釣魚大全』）は哲学に始まり（釣りをする前に）、魚の種類、釣り方、さばき方、料理方法などまでを綴った「釣り人の聖書」と呼ばれる。かの開高健もこの書の愛読家であり、釣りをするときには（そこにある静かなることを学べ（Study to be quiet））という言葉を一番大切にしていた。

日本でも1723年（享保8）に旗本の津軽采女が著したとされる『河羨録』や江戸後期に黒田五柳が書いたとされる『釣客伝』において、釣りの心得や準備に始まり、やはり魚の種類と習性や釣り方、料理方法まで記されている。

このように、釣りは多くの釣り人によって、静寂と興奮の狭間で支持されてきた。それはなぜなのか。そして、魚を釣るという行為を通じて生まれる「水と人との関係性」についても考えてみたい。

目次

巻頭エッセイ

- 2 ひとしづく 水惑星との交信 大岡 玲

特集 釣りの美学——静寂と興奮の狭間で

- 6 歴史 江戸で花開いた釣りの文化——徳川治世下の釣客群像 長辻象平
10 魅力 釣りを極めて「道」とする日本文化 ピーター フランクル
14 テンカラ 無駄をそぎ落とした究極の釣り「テンカラ」 石垣尚男
18 編集部体験 江戸前のハゼ釣りに「和竿」で挑戦！ 三ツ木新吉
24 外来魚 釣って食べて学ぶ外来魚 平坂 寛
28 科学 魚は釣られたことを覚えている？——「魚と人の交差点」を探る 吉田 誠
31 環境 ごみを拾う釣り人たち——琵琶湖で始まった新たな交流
35 文化をつくる「釣る」だけではない「釣り文化」 編集部

連載

- 36 水の文化書誌 50
メコン川は流れる 古賀邦雄
38 魅力づくりの教え 11
まちの文化発信力を維持する人々
岡山県倉敷市 中庭光彦
42 食の風土記 11
漁民から全国へ広まった「佃煮」 東京都中央区
45 Go! Go! 109水系 15
始良火山の大噴火が築いた「シラス文化圏」の肝属川 坂本貴啓
50 センター活動報告
51 編集後記／ご案内
（敬称略）

江戸で花開いた釣りの文化

徳川治世下の釣客群像

静寂と興奮という二面性をもたらす「魚を釣る」という行為は、江戸時代から本格化したといわれている。なぜ江戸時代に釣りが栄えたのか？ 『江戸の釣り——水辺に開いた趣味文化』や『釣魚をめぐる博物誌』などを著した長辻象平さんに、当時の時代背景などを含めて、日本の釣りの歴史について語っていただいた。

なぜ江戸の武士は釣りに興じたのか

『古事記』や『日本書紀』に見られる古墳時代の釣りは戦運を占う神事でした。平安時代前期には淳和天皇、仁明天皇が遊びで釣りをした記録もありますが、鎌倉・室町時代を通じて釣りの記録は乏しいです。

遊びの釣りが発達したのは江戸時代になってから。それにはさまざまな要因がありますが、ひとことでいえば徳川幕府の成立により幕府のしくみの下に寺院勢力が抑え込まれ、仏教思想の影響力が

が衰えて殺生への抵抗感が薄れました。目の前に広がる内湾の江戸湾は利根川水系の大河が運ぶ土砂

で大小の洲が発達し、多くの魚介類を育み、沿岸部には水運用の掘割や人工の水路網が発達して、釣りには申し分のない環境でした。

さらに、江戸には暇な侍が多くいました。幕府も各藩も、戦国時代の軍事体制をそのまま平和な時代に移行させたので、余剰人員が出たのです。江戸中期には旗本、御家人の約4割が、城の改修工事くらいしか仕事のない小普請組や寄合組に属していました。時間に余裕があつて目の前が絶好の環境となれば、武士の間で釣りが盛ん

になったのも不思議ではありません。

江戸時代に釣りが発達したもう一つの重要な理由は、魚に警戒心を抱かせない半透明な釣り糸「テグス」の普及です。テグスの原料は中国に生息するテグスサンという蛾の幼虫。体内の絹糸腺を抜き出し、酢に浸して引き伸ばし陰干しにしています。川の水が濁

っている中国では釣り糸としては利用されず、日本へ輸出する薬の梱包に使われていました。これに大阪の漁師が目をつけ、江戸にも伝わったのです。江戸幕府に関係した釣りの発達の要因をさらに付け加えれば、石



インタビュー
長辻 象平さん

産経新聞 論説委員
釣魚史研究家/小説家

Shohei Nagatsuji

1948年鹿児島生まれ。京都大学農学部卒業(魚類生態専攻)。同大理学部研修員を経て産経新聞社入社。シンクタンク主任研究員、平凡社「アニメ」編集部員を経たのち産経新聞社に復社。著書に『江戸釣魚大全』『江戸の釣り——水辺に開いた趣味文化』『釣魚をめぐる博物誌』などがある。また、2003年には小説『忠臣蔵釣客伝』を著すなど作家としても活動中。

「生類憐みの令」で中断も その後は庶民へ拡大

船の難破。江戸城築城のため静岡方面からの石を山積みした船が江戸湾で幾度も沈没し、格好の人工漁礁ができました。タイやアイナメなど岩礁性の魚が集まってきて、おあつらえ向きの釣り場になったのです。

遊びとしての江戸の釣りは、武士の間に興った第1期、「生類憐みの令」で禁制となった暗黒時代に始まる第2期、庶民層にも広まった第3期に大きく分けられます。第1期を代表する人物が徳川家



〔絵本隅田川兩岸一覽〕(首尾松の釣舟 椎木の夕蟬)
葛飾北斎 画(すみだ北斎美術館蔵) 江戸時代、浅草蔵前の隅田川のほとりにあった首尾の松で、釣りに興じる男女が描かれている



家臣を連れてよく江戸湾で釣りをしていた松平大和守直矩(孝顕寺蔵)

康の曾孫の松平大和守直知。その克明な日記によると、家臣を連れてよく江戸湾で釣りをしています。1659年(万治2)9月23日の大和守一行のハゼ釣り、日本最古の本格的な遊びの釣りの記録です。その23年前に没した戦国大名の伊達政宗もまた、釣りを好みました。彼は能の「鵜飼」の一節を釣りにたとえ「罪も報いも後の世も忘れ果てておもしろや」と仏教思想の呪縛からの解放を謳歌しています。完成を見ませんでした、フナ釣りのための池を設計させました。

安永年間(1772-1781)までの第2期を画する人物は、享保年間(1716-1736)初期の江戸湾での釣りの実相を記録した『何羨録』の著者、津軽采女です。弘前の大名、津軽家の分家に生

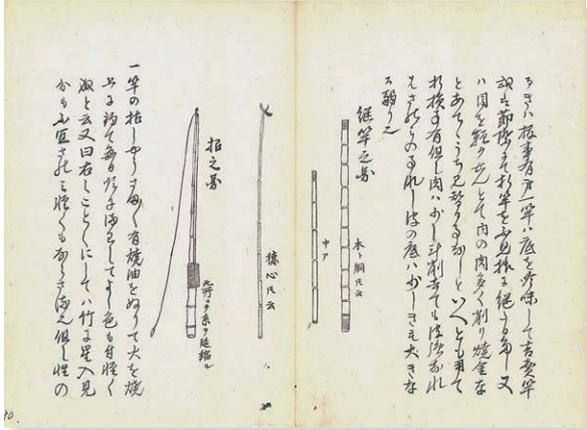
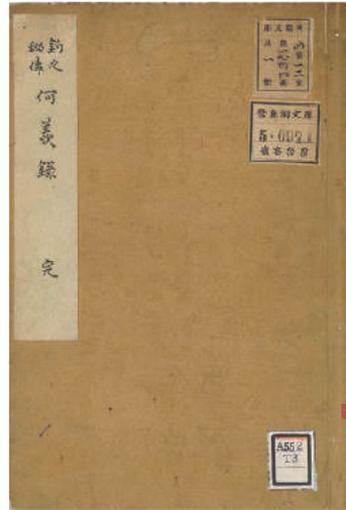
まれた三代目当主で、四千石の旗本。将軍綱吉の秘書官である側小姓に抜擢されました。吉良上野介の娘婿でしたが結婚1年で若妻に先立たれます。その後、赤穂浪士の討ち入りがあり、親戚づきあいが続いていたので吉良側の人間として冷たい目で見られていたようです。

彼は城中で足を怪我し、出仕から1年半足らずで側小姓を辞退し閑職の小普請組へ。怪我の理由はわかりませんが、辞めた時期に重なる1693年(元禄6)、綱吉による「釣魚釣船禁止令」のお触れが出ていたので、なにやら意味深いです。

同禁止令では漁師の漁労は認められましたが生魚の流通は厳しく制限されました。死んだ魚ならよいが、その場で活け締めして売ってはいけない。殺生と血の穢れを嫌う仏教思想の復活です。夏にはすぐに腐敗が始まって漁師、魚屋は大弱りでした。

余談ですが、「生類憐みの令」で保護した十万匹にも及ぶ犬を綱吉が大久保と中野で飼育できたのは、マイワシの百年に一度の豊漁期に重なっていたからです。イワシの干物は犬のエサの蛋白源でした。綱吉が没すると「自分の死後も

四千石の旗本である津軽采女が著した『何羨録』の表紙。現存する最古の釣りの本で、1723(享保8)年までに成立。上中下3巻からなる提供：国立研究開発法人 水産研究・教育機構



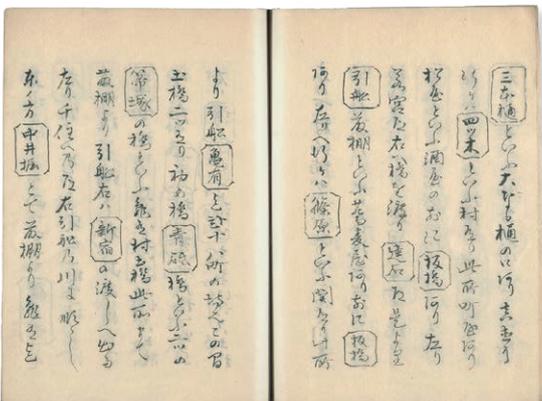
『何羨録』の「竿之部」に掲載された2種類の釣り竿。右が3本つなぎの「継竿」。左端が長さ1尺余りから2尺ほどの「招(まねぎ)」で、深場でも使えるよう柄に糸巻きが付いている

「生類憐みの令」との遺言にもかかわらず「15年間に及ぶ釣りの暗黒期は終結し、再び盛んになりました。やがて釣りの愛好者が庶民層にまで拡大すると、一般向けの釣りの入門書も普及します。1770年(明和7)に出版された木版刷の最初の釣りの書物『漁人道しるべ』は『何羨録』の抜粋、要約でした。1788年(天明8)の『闇のあかり』は、陸釣りで人気だったボラの幼魚、スバシリを主体とし、釣り道具屋と釣り場も紹介されています。この年には江戸で初めて船宿も開業されました。そして浮世絵にもしばしば描かれているように、釣りのおもしろさに女性たちも目覚めたのが、この第3期です。

世界的オペラ歌手を魅了した日本の釣り竿

江戸時代の釣り道具は世界最高水準でした。なぜなら、平和な時代に軍民転用が起きたからです。釣り竿には弓と矢の加工技術が使われました。さまざまな竹材をまっすぐに伸ばして竿にする技術は、弓矢のそれとまったく同じだったのです。

釣り竿を丈夫で美しいものにするのは漆ですが、これも日本刀の鞘を漆で固める技術からきています。錘も鉛の鉄砲玉からの転用。『何羨録』の図版を見ると多様な形の錘があったことがわかります。ヨーロッパでは竹がないので木製の釣り竿でした。英国の修道女のジュリアアナ・バーナーズによる『釣魚論』(1496年)が世界最古の釣りの本とされていますが、そこにある釣り竿のつくり方を見ると、大変苦勞しています。手元の部分を軽くするため、焼いた鉄棒を木の枝の内部に貫通させて抜いている。これでも腕の延長に過ぎず、日本の竹竿のような感度、振動の増幅作用は望めなかつたはず。和竿は明治時代にも輸出産品の一つとして外貨を稼いでいました。ロシア生まれの世界的オペラ歌手、シヤリアピンは昭和11年(1936)に来日した折、銀座の和竿の老舗「東作」を訪ね、四代目店主を「竿師のストラディバリ」と呼びました。日本の釣り竿を「美術品」と評し「一番細い先のあの繊細なところなど、ことごとく高度に発達した趣味から出た作品である。日本では魚釣りそのものが一つの芸術であるのかもしれない」と絶賛しています。日本へ旅行し

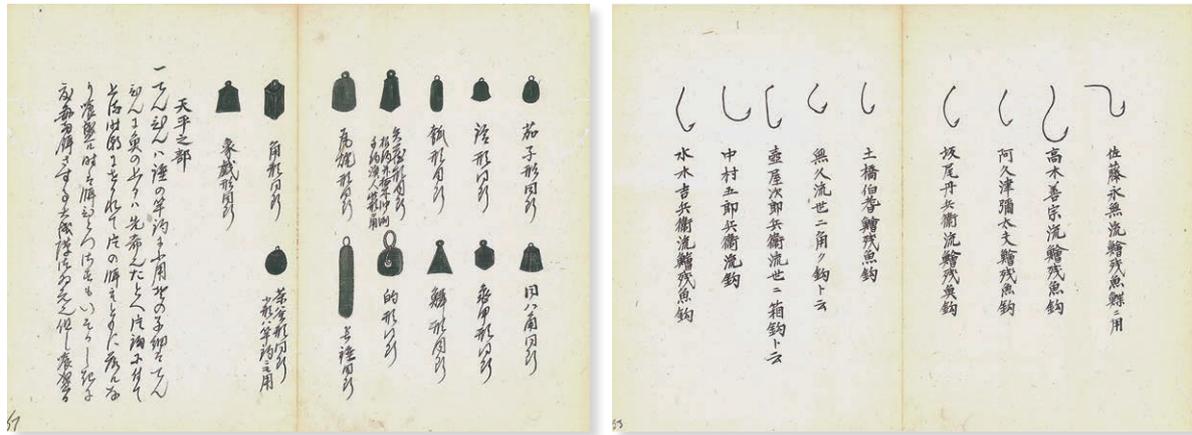


『闇のあかり』里旭(りきょく)著(国立国会図書館蔵) 庶民向けの岡釣り(舟を使わない釣り)入門書。釣り場として「四ツ木」「板橋」「亀有」「青砥」など都内の地名が並ぶ

て上等の釣り竿を買い歩くのがシヤリアピンの長年の夢でした。ちなみに、菌の悪い彼のために帝国ホテルの料理長が考案した特別メニューが「シヤリアピンステーキ」です。

なぜタナゴ釣りが江戸で流行したか

江戸時代の釣りが今の釣りともっとも違うところは、リールがなかったこと。深場では糸巻きが付いた竿を使って釣ることもありましたが、大部分は手釣りでした。おもしろいのは釣り鉤の硬さ。今の釣り鉤は焼きがしつかり入っ



『何羨録』の「錘之部」で記された多様な錘。錘の底面が丸い竿釣りに用と、底面が平らな舟での手釣り用がある

『何羨録』の「鉤之部」には33種類の釣り鉤が紹介されている。形状が微妙に異なるうえ、多くの鉤には考案した人物の名前が「～流」と記されている。武士の名が多い

て折れませんが、当時の釣り鉤は軟らかなものでした。根がかり(注)すると伸びるようになってしまった。鉤が硬すぎて仕掛け全体を失うのを嫌ったのです。曲がった釣り鉤を元に戻す道具「鉤曲げ」を持っていました。鉤が曲がると大物は釣れません。それはもうあきらめていたのです。

エサについては、『何羨録』の時代の武士たちはミミズやゴカイではなく、ハマグリやエビなどを使いました。きれいでござっぱりしたエサです。釣果より釣趣を重んじる優雅な遊びだったことがわかります。

江戸では、繁殖期に美しい体色になるタナゴ釣りも好まれました。火事が多かったので建築資材用の材木を木場などの運河に浮かべており、その丸太の下によくタナゴがいたのです。小さな竿と鉤で釣り上げる、江戸っ子の粹好みの象徴ともいえるでしょう。

ただし「大名や豪商が川べりに金屏風を張り巡らし花魁(おいらん)をはべらせてタナゴを釣った」という明治維新後に流布した、まことしやかな伝説は嘘です。徳川時代の侍や商人は庶民の貧窮をよそにぜいたくや道楽にかまけていた、とする「江戸否定」のためのデマにすぎ

ません。実際には寒さをこらえて鼻でもすすりながら釣っていたはずです。

家元も流派もない 唯一の伝統文化

江戸以外の地方の釣りでは有名なのは庄内藩。「名竿は名刀より得難し」と言い、武道の鍛錬になると藩を挙げて釣りをしていたようです。たしかに、苦竹(にがたけ)の長い釣り竿を使う磯釣りで、なおかつ城下から20kmの山道を歩いて磯場に出たから、足腰が鍛えられたのでしょう。幕末の戊辰戦争の奥羽越列藩同盟のうち、会津藩が投降した最後まで負けなかったのは庄内藩だけでした。

庄内藩の北隣、秋田の久保田藩でも釣りが盛んで、代表する人物は狂歌師としても知られた手柄岡持(本名、平沢常富)。江戸藩邸で幕閣との交渉などにあたる要職、留守居役を務めていましたが、文才にも恵まれ、朋誠堂喜三二の名で小説類も執筆しています。

ちなみに秋田では、葉を剥がしながら成長させ固く締まったヨシに漆を塗って川釣り用の釣り竿にしました。竹の分布の北限なのでヨシで代用したのです。



『東都花暦十景 木場ノ魚釣』深斎英畠画(国立国会図書館蔵) 木場付近で釣りをする子ども。江戸時代、釣りは次第に庶民へと広がっていった

こうして江戸時代の釣り文化を振り返ってみると、とりわけ興味深いのは、流派というものを形成しなかったこと。剣術はもちろん、茶道、華道すべて家元と流派が存在しましたが、釣りだけありませんでした。それは今に至るまで続いています。『何羨録』には鉤の形に「～流」と記されていますが、これはつくった人物の名前で流派とは違う。釣りは、きわめて個人的な趣味であり、「家」や「型」とらわれなかった唯一の日本の伝統文化といえるのではないのでしょうか。

(注) 根がかり

釣りの仕掛けが水底の岩や石、水草、海藻といった障害物に引っかかること。



歴史



魅力

釣りを極めて「道」とする日本文化

国際的に著名な数学者であり、かつ大道芸人でもあるピーター・フランクルさん。12カ国語を話せる才能を活かし、これまで世界100カ国以上を訪れている。そんなフランクルさんは、「歳を重ねても上達できる趣味をもちたい」と約10年前に釣りを始めたという。フランクルさんに釣りの魅力、そして海外との比較を含めた日本の釣り文化について語っていただいた。



インタビュー

ピーター フランクルさん

数学者/大道芸人

Péter Frankl

1953年ハンガリー生まれ。1971年国際数学オリンピック金メダル獲得。1977年数学博士号取得。1978年ハンガリーサーカス学校で、舞台芸人の国家資格を取得。1979年フランスに亡命。1980～88年は英国、西ドイツ(当時)などに招かれ講演、共同研究を行なうと同時に、各国の路上で大道芸を披露。1987年フランス国籍取得。1988年から日本在住。

交友関係が広がったのは 釣りを始めたおかげ

釣りの魅力は、何歳から始めても上達できることだと思います。ゴルフやテニスなど、体を動かすスポーツは体力勝負です。釣りも体は動かしませんがそれだけではなく、状況に合わせて仕掛けを変えするなど、経験を積むほどに腕が磨かれる。それは釣りのすばらしいところですよ。

私が本格的に釣りを始めたのも、50代半ばでした。それまでの釣り経験といえば、生まれ故郷のハン

ガリーで子どものころに一度だけ。そのときはまったく釣れず、「釣りは自分の領域ではない」と思って生きてきたのです。

そんな私が数十年前ぶりに釣りをしたのはテレビの収録でした。スタッフの方々のサポートもあり、2日間で10枚以上のヒラメを釣りました。これがいよいよほかに楽しく探求心が湧いたので、それから雑誌や釣り具店で釣りに関するあらゆる情報を集めるようになりました。

それ以降、乗合船でマゴチ釣りに行けばその船の年間記録を更新する17匹を釣り上げ、ヒラメ釣りに出かければ18枚も釣り、食べ

れないので友人に送ったこともあり。それが2012年ごろです。

釣りの腕が上達した理由の一つに、乗合船での釣り仲間との出会いがあります。その一人である獣医師とは毎週のように千葉や三浦沖へ釣りに出かけて、仕掛けや技に関する基礎を教わりました。まさに関東での釣りの師匠といえる存在です。彼のおかげで大きなマダイを何度も釣り上げました。

乗合船ではさまざまな業種の方とのふれあいがおもしろく、情報交換して気が合えば後日一緒に釣りに出かけることもあります。

私は大企業に勤めたことがあり

ませんので、大人になってからの出会いは少なく、友人のほとんどが同じ数学者か大学教授でした。しかし、釣りではタクシーの運転手さんや車の塗装を手がけている人など、以前は会えなかった人たちと知り合いになりました。釣りを接点に交友関係が広がったことは、私の人生にとって大きな変化です。

さらに、釣りをするようになったことで以前より季節の移り変わりを楽しめるようになりました。

というのも、冬は大洗のヒラメが解禁になりますし、夏は相模湾でカツオとマグロのエサ釣りが解禁に



神奈川県横須賀市の久里浜港から釣り船「平作丸(へいさくまる)」に乗り込んでマダイ釣りに挑戦したピーター・フランクルさん



釣り上げたイナダ(ブリの幼魚)を手にするフランクさん。ブリは成長すると名前が変わる出世魚だが、地方ごとに呼び名が異なる。関東はワカシ→イナダ→ワラサ→ブリ、関西はツバス→ハマチ→メジロ→ブリ、北陸はコクラ→フクラギ→ガンド→ブリなど

なります。ちょうど梅雨の時期は、千葉でヒラマサが多く釣れます。

以前は「冬は寒くて外に出たくない」「日本の夏は蒸し暑くて苦手」と思っていました。今は次の季節が待ち遠しいですね。

特定の魚を狙って 進化した日本の釣り

これまでに私は、ハワイやタイ、ベトナムなど、海外でも何度か乗合船での釣りを経験しました。海外では特にターゲットを定めず、いろいろな種類の魚を一度に狙う「五目釣り」が一般的です。五目釣りは仕掛けも単純で、複数の釣りのいちばん下に錘を付けて、魚がかかるのを待つだけ。

しかも、たいいてい半日が釣り、残りの半日がバナナボートやパラセーリングなどとセットです。釣りはアクティビティの一環として気軽に楽しむもの。最後は釣った魚で船上バーベキューができて楽しいのですが、釣りの技術を試すには物足りません。トロリーングも人気がありますが、魚がかかるまでのすべての工程を乗組員がやってくれるので、客はかかった魚とのフアイトを楽しむだけ。

それに対して日本の釣りは、マダイならマダイ、イナダならイナダと特定の魚に狙いを定め、しかもその魚に特化した仕掛けまであることが特徴です。世界各地の釣具屋に行っても、日本の有名なメーカーのリールや竿、仕掛けがたくさん置いてあるんですよ。

さらに興味深いのは、同じ魚を狙うにしても、地方によって仕掛けさえ異なるという点です。例えばマダイ。瀬戸内海では、エサの代わりにタイラバ(あるいはタイカフ)と呼ばれるビニールやラバーに色づけしたルアーを仕掛けにするのが一般的です。秋田の方では、イソメという生きものをエサにして釣ります。あるいは外房付近では「テナヤ釣り」といって、錘と鉤が一体化した釣り具(テナヤ)に、

エビなどのエサを付けて狙います。このように同じマダイでも、とにかく地方によってさまざまな方法があるのです。しかも、その多くは地域に古くから伝わる伝統的な方法です。都道府県の多くが海に面している日本ですが、かつて、特に江戸時代の幕藩体制下ではほかの地域との交流が今ほど盛んではありませんでした。そのなかで、なんとか魚を食べようと、地域ごとに独自の釣り文化が発展していったのでしょ。

たんに食べるためなら何が釣れてもいいはずですが、特定の魚を狙うために仕掛けを工夫して知恵を絞る。これは日本の釣りのとても優れたところで、技を極めるとい意味でまさに「釣り道」といえます。

また、釣り人の間では、狙っていない魚が釣れることを「外道」といいます。ただし、イナダを狙っていて上等のカツオが釣れればそれはうれしいことですよ。そうした歓迎すべき外道は「ゲスト」と呼んで迎え入れるのです。

魚や環境を守る 海外の取り組み

環境先進国であるオーストラリア、

ニュージーランドでは、魚や環境などの資源を守るために、さまざまなルールが設けられています。私の乗った釣り船では、テールの上に各種の魚の絵が描いてありました。釣った魚をその絵と比べて小さければ逃がすべきだという考えで、厳格に運用されています。さすが環境先進国だなと感じました。

日本でも規則を設けている場所はありません。しかし、限られた資源を守るためには、日本も海外を参考にすべきではないでしょうか。

私の母国であるハンガリーには海がありませんので、巴拉トン湖という中央ヨーロッパ最大の湖での釣りが主流です。近年巴拉トン湖では、水質をよくして湖全体の観光価値を上げるため、エンジン付きの釣り船の航行が禁止されました。

ですから釣りをする際は手漕ぎのボートやカヤック、またはバッテリーで動く音の静かな船に限られます。このルールを設けたことで、巴拉トン湖では魚が増え、釣りが増え盛んになっているそうです。

昨年、釣り名人で知られる友人が船を出してくれて、巴拉トン湖で幼少期以来の釣りをしました。



1 船長が指示するタナ(深さ)に仕掛けを投じて、数十秒に一度竿をあおって魚を誘う。4～5分で新しいエサに換える 2 早朝、釣り船に荷物を積み込む 3 自分の竿を船べりにしっかり固定 4 今日のエサはオキアミ。1匹だけ釣にかける 5 魚を誘うコマセもオキアミ 6 フランクルさんの釣果。残念ながらマダイは釣れなかったものの、イナダ4匹、サバ、カサゴ、タカノハダイが1匹ずつ、メバル4匹となった

バラトン湖での釣りは苦い思い出しかなかったのですが、今回はノーザンパイク(カワカマス属の一種)がたくさん釣れたのです。発泡スチロールに入れてブタベストまで持ち帰り、友人が腕を振るった料理を、彼の奥さんと3人で楽しめました。

森や山からの「水」が釣りに支えている

本格的に釣りを始めて10年ほど経ちますが、釣りは私にとつて「最大の趣味」といえるものです。

以前、久里浜でタチウオ釣りのために乗った乗合船で、80歳くらいの男性と隣り合わせたことがあります。話をしたところ、以前は自分の車でいろいろなところへ釣りに出かけたそうですが、年齢を考えると車の運転はやめ、今は電車で移動しながら乗合船での釣りを楽しんでいられるということでした。年齢ながら、タチウオを10匹以上釣り上げる腕前に感心しました。

年齢を重ねれば体力も衰えますので、今はできることも次第に難しくなるでしょう。しかし、エサ釣りなら電動リールもありますので、私もできるだけ長く釣りを続けていきたいと、その方を見てい

て思ったのです。また、海外に行っても日本の地方に行っても、釣りはその土地の人たちと知り合いになれるきっかけにもなりますね。一方、釣りは自然とのつきあいでもあります。「釣りは森から始まる」と言われています。魚が釣れる条件には、山から川、あるいは地層を経て海に流れ込む「水」が大きく関係しています。

森で培われた滋養分が川を通じて海に流れ込み、それが魚のエサとなるプランクトンを育てます。

栄養が豊富な場所には魚も産卵します。そこで小魚が増え、そこに小魚を狙う大きな魚が集まって、いい漁場になります。私は瀬戸内海でよく釣りをしますが、島と島の間ではなく、誰も住んでいない島の周りがポイントです。人の手が入っていないため、森から栄養豊かな水が海に流れ込み、その水が魚たちにとって理想的な環境を育むからです。

山が荒廃し、自然が壊されれば、豊かな海もなくなってしまうでしょう。釣りを始めるまでは考えもしなかったことですが、森や山からの水がいかに大切であるかを、釣りを通して実感しているところです。

(2018年4月19日取材)



魅力

無駄をそぎ落とした究極の釣り 「テンカラ」



川の上流部に棲み、水生昆虫を食すイワナやヤマメ、アマゴを釣る「テンカラ」。使うのは、竿と糸と毛鉤の3点だけという、至ってシンプルな釣りが近年人気を集めている。国内外の講習会を通じて、テンカラの方法と魅力を伝える「テンカラ大王」こと愛知工業大学名誉教授の石垣尚男さんに、テンカラの歴史や魅力、海外での反応について伺った。

職漁師由来の 謎めいた釣り

——テンカラとはどのような釣りののかを教えてください。

溪流に棲むイワナやヤマメ、アマゴを「毛鉤^{けぼり}」で釣る方法をテンカラと呼びます。毛鉤とは、鉤の軸に小さな羽毛を糸で巻いて水生昆虫に似せたもの。その毛鉤を魚が潜んでいそうなポイントに打ち込み、水面や水面近くを流して漂わせ、本物の水生昆虫と間違えて飛びついた魚を釣り上げるのです。魚が身を躍らせて食いつく瞬間が見えるのでとてもスリリングですし、竿と糸と毛鉤だけのシンプルな仕掛けということもあって、徐々に人気が高まっています。

——釣りに必要なものは六物（釣り鉤、糸、竿、エサ、錘、浮き）といわれますが、テンカラは毛鉤、糸、竿の「三物」。特殊なのですね。

三物で成り立つ釣りは、テンカラだけではないでしょうか。しかも、テンカラの毛鉤は凝らなくても大丈夫です。見栄えがよくなるでも十分釣れます。これは先達が見つけた知恵です。そもそもテンカラは、山奥の溪流でイワナを釣り、その魚を乾燥させて温泉宿などに運んでいた「職漁師^{しやくいし}」由来の釣りだとされています。昭和30年代まで、職漁師たちは夏になると山奥の溪流のそばに簡単な小屋をつくり、数人で共同生活しながら魚を釣っていました。

テンカラという言葉が知られるようになったのは今から40〜50年前。かつては「毛鉤」や「毛釣り」などの呼び方がありましたが、テンカラという名称に集約されました。語源も調べたのですが、はっきりしたことはわかりません。発祥地も不明です。新潟と長野の県境にある秋山郷（長野県下内郡^{しもうち}栄村）の毛鉤は秋田のマガギが伝えたとの説もありますが、定かではありません。

ただし、イワナ釣りの記録ならば元禄年間（1688〜1704）まで遡れます。1694年（元禄7）に加賀藩奥山廻り役（注1）が記した『宗兵衛記録』に、「黒部川でイワナを獲っている五人組を見つけたの

（注1）奥山廻り役

加賀藩が立山・奥黒部の国境の監視のために設けた役で、有力な百姓がその任にあたった。時代が下ると木材盗伐や密貿易の取り締まりに力を注いだ。



インタビュー
石垣 尚男さん

愛知工業大学名誉教授

Hisao Ishigaki

1947年静岡県生まれ。東京教育大学(現:筑波大学)体育学部卒業。医学博士。動体視力研究の第一人者。27歳でテンカラと出合う。各地で開く講習会では科学的分析をもとにわかりやすく指導することから「テンカラ大王」と呼ばれ親しまれている。アメリカやイギリスなど海外でも指導・普及活動を行なう。釣り関連の著書に「超明快レベルラインテンカラ」、DVD「テンカラ新戦術」など、研究者としての著書に「スポーツ選手なら知っておきたい「眼」のこと」などがある。

天然のイワナとヤマメが棲む小菅川(山梨県)の源流域で竿を振る石垣さん。このエリアは小菅村漁協が1人5匹までの「持ち帰り制限」を設定している



合いは？
興津川の河口部で生まれ育ったので、子どものころから海や川で遊んでいました。小学校5年生からアユのどぶ釣り(注2)をしていましたし、中学生ではキス釣りも始めました。大学生になっても帰省すれば釣りをしていましたね。
テンカラに出合ったのは27歳のときです。ある日、愛知県の神越川上流でエサ釣りをしていました

**釣れる魚だけ釣る
テンカラの優しさ**

山間に暮らす人たちがたんぱく質を確保した伝統的な技。それが、テンカラとして生きつづけていると言つてよいでしょう。

で、小屋を壊したうえで釈放した」という記述が残っています。釣り方は書いてありませんが、この五人組が職漁師だとすれば毛鉤で釣っていた可能性がります。職漁師は多いときに一日200匹釣り上げたそうですから、いちいち本物の虫を採つて鉤につけるような手間はかけず、1本の毛鉤でパツと釣つては魚籠に入れ、すぐさま竿を振るような効率のよい釣り方だったはずですよ。

釣り、そしてテンカラとの出会い？

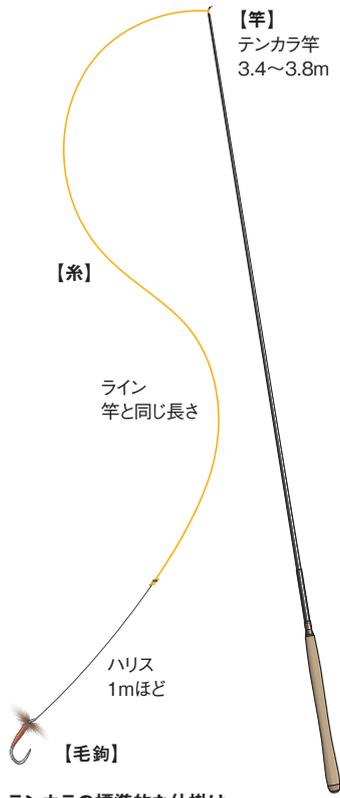
が、まったく釣れません。すると後から来た人がさつと支度してテンカラを始めて、目の前でアマゴを2匹釣り上げて去っていきました。驚きましたよ。それがテンカラとの出会いです。本を読んで勉強して「よし、テンカラをやってみよう！」と。エサ釣り、ルアーフィッシングも続けましたが、徐々にテンカラだけになりました。
テンカラ一筋になった理由は、子どもの遊びには、だまされたりだまされたりするものが多いですね。しかもそれが楽しい。テンカラも同じで、毛鉤というニセモノでだまして釣るもの。「だましちゃったぜ！わっはっは！」というような本能的なおもしろさと遊び心があります。



テンカラで用いる手巻きの毛鉤。「凝った装飾は必要ないし、色も形も自由です。それで釣れます」と石垣さん。ただし、魚をできるだけ傷つけないために、パープレスフック(アゴなし鉤)が望ましい

(注2)どぶ釣り

清流の淵やよどみに毛鉤を沈めてアユを釣る方法。江戸時代末期ごろ金沢に始まり、小田原や静岡地方に伝わる。「沈め釣り」ともいわれる。



テンカラの標準的な仕掛け



1撮影のために20分だけ滞在した小菅川の源流域で天然ヤマメを2匹も釣り上げた石垣さん。ヤマメを弱らせないよう慎重に川へ戻した 2水面漂う水生昆虫を装って毛鉤を流す 3鉤の重さによって毛鉤は水面から5~10cm沈む。それくらいが魚の習性に適した深さという

テンカラは、イギリスで生まれてアメリカで発展したフライフィッシング（フライ）とよく比較されます。フライがアメリカに渡るとリールが開発され、ドライフライという水面に浮く毛鉤をつくる方法も編み出されました。つまり、フライは魚を釣る目的のために、いろいろと「付け足していく」わけです。ところがテンカラは「必要なものはこれだけ」と削っていった結果、道具は最小限の三物です。テンカラは付け足すのではなく「削っていく」釣りなのです。

——「起きて半畳寝て一畳」というように、多くを求めず、無駄なものこそぎ落とすべく日本古来の精神性の現れでしょうか？

昔、日本人は貧しかったですが、でも、ものがなかったからこそ知恵や工夫が生まれました。例えば、部屋にちゃぶ台を置けば食卓になり、片づけて布団を敷けば寝室にもなる。一つのものでいろいろと賄ってしまうのは、生活のなかで日本人が編み出した知恵でしょう。

テンカラも同じで、毛鉤は1種類あればいいのです。「この毛鉤で出てきてくれないなら、また今度釣ればいいさ」と考えて、次のポイントに向かう。自分の腕と竿と毛鉤が届く範囲で、そのとき反応

する魚だけを釣って楽しむ。手を替え品を替え、何がなんでも魚を引きずり出そうとする釣りではありません。テンカラは、日本人の自然に対する優しさが現れた釣りともいえるでしょう。

**テンカラは海を越え
「TENKARA」**

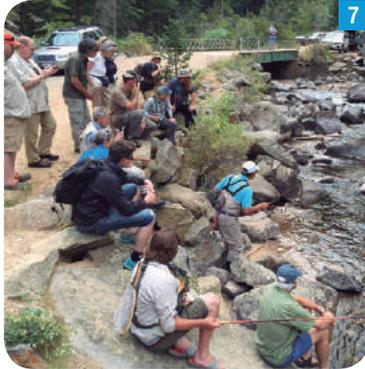
海外でテンカラ人気が高まっているというのは本当ですか。

はい。日本より人気があるかもしれないですね。アメリカには、「the more you know, the less you need」（知れば知るほど、必要なものは少なくなる）ということがあります。

今、アメリカでテンカラが「TENKARA」(テンカール)と呼ばれ注目されているのは、日本のテンカラのあり方が、このことわざの本質に触れているからです。

ご存じのように、アメリカは物質文化の方向に突き進んできました。ところが「生きるために、そんなにいろいろ必要なの？」と考える人たちが出てきています。テンカラはまさに「知れば知るほど、必要なものが少なくなる」釣り。

テンカラを知ったアメリカの人たちは「こんなシンプルなもの釣れるじゃないか！」と感激して、



4 15 山梨県北部留郡小菅村で行なわれた「第4回小菅川テンカラ教室」。石垣さんが2日間で32名の参加者にテンカラを手ほどき。主催は小菅村の廣瀬屋旅館、共催はアゴなし釣の普及に取り組むNPO法人パーブレスフック普及協会。石垣さんは同協会の監事も務める 6 7 アメリカのコロラド州で行なわれた石垣さんのTENKARA講習会。海外での認知度は年々高まっている

「いい釣りだ、クールだ」と認めています。クールと言われるのは、「三物で釣る。これで釣れなければしかたない」とあきらめる「潔さ」にあります。

ところが最初からそうだったわけではありません。私が海外でテンカラの講習会を初めて行なったのは2009年のニューヨーク州。反応は冷たかったですね。リールはないし、竿も入れ子構造の振り出し竿。アメリカの人たちから見ると、子どもがやるような「チー

プ」な釣りなんです。翌年はカリフォルニア州に行きましたが反応は変わらず。ところが、2011年のモンタナ州では80〜90名が参加しました。テンカラが知られはじめ、見る目が変わったのです。

私のテンカラの弟子にダニエル・W・ガルハルドというアメリカ人がいます。彼にはテンカラだけでなく、日本文化についても教えてください。ダニエルがテンカラUSAという会社を立ち上げてテンカラのイベントを開き、私が講演するこ

とを続けた効果もあったようです。2017年のコロラド州では、200名ほど集まりました。飛行機に乗ってきた人もいましたね。海外の人たちは「TENKARA」を題材に動画を投稿していますし、アメリカにはテンカラのプロガイドまでいます。

水を抜きにして釣りと魚は語れない

石垣さんにとってテンカラとはどんな存在ですか？

テンカラがあるから生きていく。それくらい大きなものです。テンカラに出合ってから40年以上、年間50日は竿を振っているのにまったく飽きません。テンカラを楽しんで、家に帰ってきた途端に「また行きたいな」と思うくらいです。

行きたいな、と思うとき、どんな光景が脳裏に浮かびますか。

「自分が溪流に佇んでいるイメージ」ですね。美しい緑のなか、きれいな水が流れていて、鳥がさえずっている——そういう空間に立っている自分を想像するだけで幸せな気分になります。そしてそこには必ず水がある。「釣りで大事なものは魚でしょうか？」と思うかもしれませんが、水なくして魚は語れ

ません。

川の水量は千変万化です。水量、濁り、時間帯によって変化しつづけます。その水のなかに魚はいる。釣り人は「増水して水位が10cm高い。魚はどうしているのか？」今は水温が低いけれど、太陽に照らされて上がるはず。何度になれば魚は活性化するか？」と考えますが、そのときは魚ではなく水について考えている。つまり、魚を語ることは、水を語るようなのです。

初めてテンカラを体験して2匹釣りしました。虜になりました。

そうでしょうか！ そういう人を増やしたいと講習会を続けています。それに、テンカラという釣りそのものがおもしろいので、「魚を持って帰りたい」とか「たくさん釣りたい」という欲がだんだんなくなってくるのです。

つまり、テンカラが普及すると、魚が今よりも生き残れるようになります。自分の趣味のためだけに魚をごっそり釣って持ち帰るのではなく、自然への負荷をなるべくかけず、みんなで楽しんでシェアすることが大切です。生態系サービスが注目されるようなこれからの時代、テンカラは非常によい釣りの手段だと考えています。

(2018年4月20〜21日取材)



のハゼ釣りに



編集部体験

「和竿」で挑戦！

江戸で始まった釣りは、時代を追うごとに庶民へと広まっていった。それを支えていたのは、竹を材料とする日本古来の竿「和竿」だ。『何羨録』に倣い、和竿を使ってかつての江戸の人々が楽しんだ釣りを体験したいと、東京・深川で「すし 三ツ木」を営む傍ら和竿も製作する三ツ木新吉さんに協力を仰ぎ、和竿を用いた江戸前の魚釣りに挑戦した。

ナビゲーター

三ツ木新吉さん

「すし 三ツ木」店主／和竿職人

Shinkichi Mitsuki

1948年東京都生まれ。中学校1年生から板前修業を始め、「京橋 与志乃(よしの)」の吉祥寺支店を経て、1970年、東京・深川に「すし 三ツ木」を開店。釣り好きが高じて和竿づくりを始め、のちに江戸和竿師・四代目竿治に師事し、「新治(しんじ)」の竿銘を与えられる。江東区認定の伝統工芸マイスターとして、今も和竿づくりに日々取り組む。著書に『寿司屋の親父のひとり言』がある。



江戸前





手間を惜しまず 妥協せず

—三ツ木さんの和竿づくり

和竿のよさは 手ごたえと美しさ

シヤツシヤツシヤツシヤツ……。竹を削るやすりの音が響く。前掛けをつけてあぐらをかいた男性が、時折手を休めて、顔の前に竹をかざして目を凝らす。「ちよつと膨ら

んでるなあ」とつぶやき、再びやすりを掛けはじめ——。

この男性は三ツ木新吉さん。東京・深川の「すし三ツ木」の店主で、和竿をつくる職人でもある。取材は三ツ木さんがつくった和竿をお借りするため、事前に和竿づくりの一端を見せていただいた。

和竿とは、天然の竹(注1)を主な材料とした釣り竿のこと。昭和20年代に外国から輸入されはじめた六角形の竿と区別するために、その名が使われるようになったとされる。竿に漆を塗ってあるのが特徴で、竹を一本そのまま用いた「延べ竿」と、数本の短い竿をつなぎ合わせて使う「継ぎ竿」(P21写真89)がある。

東京近辺にいるハゼ、キス、フナ、タナゴといった魚種ごとにつくられた竿は「江戸和竿」と呼ばれる。開祖は天明年間(1781—1789)に下谷いなり町で開業した泰地屋東作とされる。釣りの最中に誤って和竿を海に落としたことを機に和竿づくりを始めた三ツ木さんが、研究生として教えを請うた四代目竿治(系賀一隆さん)もその系譜に連なる。

和竿のよさについて、三ツ木さんはこう語る。

「第一に『釣り味』ですね。魚が

エサに食いついたときの手ごたえがよくわかる。ほかの素材の竿ではちよつと味わえない繊細さがあります。第二に『竿の美しさ』。

漆塗りもさることながら、和竿は魚が掛かると美しい弧を描くのです。他人から『きれいな竿だな』と思われない。しかも自分でつくった竿で。一種の美学かもしれないね」と笑う。

若いころは人の2倍釣ろうとしたりやりきだったが、和竿をつくりはじめて「この竿で楽しくきれいに釣ろう」と思うようになったそうだ。

別々の竹から 一本の竿を仕立てる

三ツ木さんの言う「釣り味」のよさ。それはしなやかで弾力性に富む竹という素材によるところが大きい。それだけに竹の選び方と扱いは重要だ。三ツ木さんの作業部屋には大量の竹がストックされている。

「真田状で節目が詰まっているのがいい竹ですが、100本のうち10本あるかどうか。竹は11月に山から切り出し、青竹のまま火であぶって脂を抜いて、3月3日のひな祭りまで外で干し、室内で保管



2



1



4



3

1 三ツ木さんのお店の2階に展示されている江戸和竿 2 三ツ木さんが釣り大会で優勝したときに用いた手製のキス竿 3 平やすりで竹を削って継ぎ目を合わせる 4 竹の曲がりや膨らみ具合を見る三ツ木さん。竹は必ず曲がっているので温めて矯正したり、削ったりする作業が欠かせない

(注1)天然の竹

和竿で用いる竹には、布袋竹(ほていちく)、真竹(まだけ)、淡竹(はちく)、黒竹(くろちく)、矢竹(やだけ)、丸節竹(まるぶしちく)、高野竹(こうやちく)などがある。

和竿(継ぎ竿)の主な工程

※流れを理解しやすくするため大幅に簡略化した。実際には100にも及ぶ工程がある

- 一 竹選び:竹を炭火であぶり、表面に出てきた脂を拭きとる
- 二 切り組み:竹の種類や質、節目、太さなどを勘案し、別々の竹から切り出して一組の竿に組み合わせる
- 三 火入れ(粗矯め):炭火などを当てながら竹の曲がりを矯正する
- 四 巻き下:やすりなどで竿の継ぎ目(継ぎ口)の下地を整える
- 五 糸巻き:継ぎ口を補強するために絹糸を巻く
- 六 継ぎ:継ぎ合わせたときピシッと組み合うようにやすりなどで調節
- 七 塗り下:漆を塗る前に行なうやすり掛けなど細かな作業のこと
- 八 火入れ(中矯め):火入れは何度も行なう
- 九 漆塗り:漆を塗る作業。何度も繰り返す
- 十 仕上げ(上げ矯め):最終仕上げのための火入れ



5和竿の材料となる竹および製作中の竿。竹はこのほかにストックがある 6天井に竿を押しつけて、継ぎ目が「への字」にならないかどうか確かめる 7三ツ木さんが和竿づくりで使う道具の一部 8上の2本が並継で、下の2本が印籠継。印籠継とは一方の竿の端に矢竹などの芯を差し込んでおいて、継ぐもの 9上が並継、下が印籠継。印籠継はこのように継ぎ目に段がつかない



好みに合わせた自分だけの竿

冒頭で三ツ木さんがやすりを掛

するので「三ツ木さん」
夜中に「カリッ、カリッ」という音がすれば、それは虫が竹を食っている証拠。どこに潜んでいるか探って虫を退治する。質のよい竹ほど虫が好む傾向があるという。和竿づくり、特に継ぎ竿は、どの竹のどの部位を切り出して使うかを決める「切り組み」から始まる。「対象魚や竿の長さに応じて、何本継ぐかを決めて竹を選びます。通常は部位ごとに別々の竹から切り出します。同じ竹では繊維の流れや硬さが一緒なので、腰の弱い(柔らかい)竿になってしまうからです」
継ぎ竿には「並継」と、江戸和竿の開祖・東作が編み出したとされる「印籠継」の2種類があり、印籠継の方がより手間がかかる。和竿は継ぎ目がしっかり合っていないと、魚が掛かったときに「への字」に折れ曲がってしまう。三ツ木さんは天井に竿を押し当てて、曲がり具合を何度も見ていた。「への字」になるのは竿師最大の恥とされ、ある程度作業が進んでいても別の竹でつくり直す。

けていたのはキス用の「手バネ竿」(注2)の穂先だ。継ぎ目がびたりと合ったので、次に細かい番手の紙やすりで穂先全体を磨きはじめた。
「漆を塗る前のこの磨きが大切。漆の乗りの良し悪しが決まる。ほら、艶が出てきたでしょ？」と言いながら三ツ木さんの手は止まらない。江戸和竿は漆を何度も塗る。1回塗ると0・1mmほど厚みが出るので、それも見越して遊び(余裕)もつくっておくという。まさに職人技だ。
和竿は、金具を付けるリール竿も可能だ。「メンテナンスが大変そう」「すぐに壊れてしまうのでは？」と思うかもしれないが、そうではない。
「グラスファイバーやカーボン素材の竿は、折れてしまったら買い換えだけれど、和竿なら折れた部分だけ別の竹でつくればまた使えます。また、『〇mでこういう竿が欲しい』とオーダーメイドできるのも和竿の利点。竿の調子(バランス)も途中で確かめられるので『もう少し柔らかい方がいい』と注文できます」
はたして、和竿はどんな感触なのか、江戸前のハゼ釣りで確かめてみたい。

参考文献・資料

『釣りにかかわる仕事』(ほるぶ出版 2005) / 『趣味の和竿づくり』(大陸書房 1983) / 株式会社 週刊フリニュース「釣り文化資料館」展示パネル / 一般財団法人 伝統的工芸品産業振興協会 Web「日本の伝統工芸品」

(注2)手バネ竿

糸巻きが手元についていて、釣り糸の長さをある程度調整できるもの。



竿から伝わる魚の鼓動

季節先どり！江戸前のハゼ

槽漕ぎの和船で 深川を出発

三ツ木新吉さんの和竿づくりを見学した3日後、編集部は再び深川を訪ねた。いよいよ和竿で江戸



1 ハゼ釣りに挑む編集部と三ツ木新吉さん。皆、真剣なので自然と口数は少なくなる
2 釣船橋から出航する前の「富士見丸」
3 船長を務める斎藤正雄さん 4 和竿と仕掛けを用意してくれた三ツ木さん

前のハゼ釣りに挑戦する日だ。

「釣りをするのなら、槽漕ぎの和船がいい」。そんなわがままを聞き入れてくれたのは、三ツ木さんが懇

意にする深川富士見。江戸末期から釣り宿を営む老舗である。

用意していただいたのは、船頭

さんに槽を漕いでもらいながら釣りをする通称「ねり船」。とても

貴重な船だ。釣り場まではエンジン

で走る。着いたら槽に切り替えて、ゆっくり船を動かす「流し釣

り」でハゼを狙う。午前7時30分

に「釣船橋」から出航した。

船長は斎藤正雄さん。褐色の肌がそのキャリアを物語る。

「今の季節は、ハゼにはまだちょっと早いんです。一番釣りにくい時期

ですが、まあ行ってみましょう」

水中の様子が 手にとるように

開発が進む豊洲の北側を回って東雲運河へ。東雲水門を過ぎると

岸から釣りをする人の姿があった。

「カラス貝が岸壁に付いているでしょ？ あれを狙うクロダイが棲

みついているんですよ」と三ツ木

さん。東京湾の最奥部にクロダイがいるとは意外だが、実はこの一

帯は「16万坪」と呼ばれた江東区

有明の貯木場跡。かつては深川近辺の漁師の漁場で、ハゼもたくさん釣れるという。

ポイントに着いた。斎藤さんがエンジン止め、三ツ木さんが前

日の夜中に準備したハゼ竿を取り出す。「ハゼ竿を使うのは今年初

火入れして曲がり矯正したから時間がかかったんだよね」と三ツ

木さん。

鉤にエサ（青イソメ）をつけて、漆でピカピカ光る和竿を握る。船

べりからそっと糸を垂らした。

釣りの経験は多少あるが、和竿

はそのどれも違った。ものすごく繊細なのだ。海底に鉤が着地す

る瞬間、さらには鉤が泥に埋もれる状態まで手にとるようにわかる。

「こういう和竿でハゼを釣ったら最高だよ！ 手ごたえがいいんだ。

数匹釣れたら満足するはずさ」と槽を漕

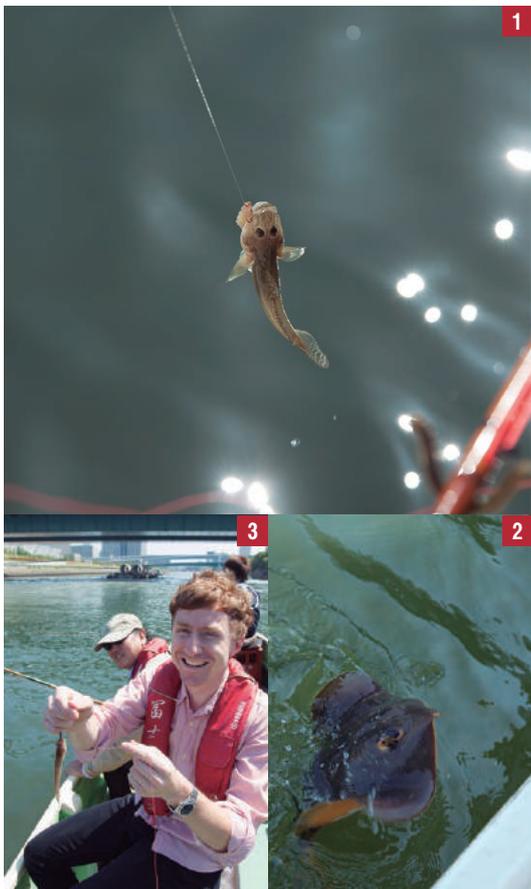
ぎながら斎藤さんが言う。

竿を通して 何かが震える

一度移動して、再び糸を垂らす。

ときどき竿を上下に動かし、エサを揺らして魚を誘う。数分後、「プルプル」という手ごたえが……。





1 「腕をゆっくり動かして魚を『竿に乗せる』のがコツ」という三ツ木さんのアドバイスを守って釣れたハゼ 2 前触れもなく釣れたアカエイ 3 ハゼを釣り上げ喜ぶ編集部員

釣れない時期と聞いていたので半信半疑で竿を立ててみると、何か食いっついてる感触があった。「糸を口でくわえて手でたぐるんだ。たぐった糸は絡まないように船のなかに落とすんだよ」

斎藤さんの指示に従う間も「プルプル」という振動が水中から伝わってくる。「逃げないで！」と祈りながら糸をたぐると、びっくりしたような顔のハゼが姿を現した。「やったね。釣れないと思ってたけどよかったなあ」と三ツ木さんが我が事のように喜んでくれた。

事前に聞いていたが、和竿の「釣り味」は想像以上だった。今でもあの「プルプル」という感触は思い出せる。その後、別の編集

部員がハゼ1匹と狙っていないアカエイを1匹釣り上げて、3時間ほどの和竿体験は終了した。時季外れのハゼ釣りなので釣果こそ芳しくなかったが、軽くしなやかで、日の光にきらめく和竿を握っているだけで心が躍った。

日本最古の釣り専門書『何羨録』が書かれて約300年。当時とは地形も海岸の様子も異なるが、竹の竿を手に水面を見つめる行為はきつと同じだ。三ツ木さんが丹精込めて仕上げた江戸和竿を手に、斎藤さんが櫓を漕ぐ船でハゼを釣る――時空を超えて、江戸時代の人々と釣りの楽しさを共有できた気がする。

(2018年5月11、14日取材)

江戸前今昔釣り話

「アオギス釣り」は粋な遊び

有限会社 深川富士見 取締役社長 石嶋 一男さん



五代目の石嶋一男さん(80歳)に、かつての江戸前の釣り風景をお聞きした。

江戸前のクロダイ釣りは、ちょうどこの時分から始まります。エサは「こさく」(芝エビ)です。当時はカレイやスズキなど大型の魚は大きな帆を張って風の力で網を引く打瀬舟で獲っていました。その網に芝エビが混ざるので、だから早朝、沖まで舟で走って芝エビを1匹1円で買い、舟の生け簀に入れておいてエサにしていた。

江戸前の釣りといえばアオギス釣りが有名でした。残念ながら私が海のことを覚えはじめたころに終わりましたが、今もいるシロギスに比べるとアオギスは細身で少し大型でした。味はシロギスの方がおいしいのですが、アオギスは引きが強くて人気がありましたよ。

有明のあたりは、昔は遠浅の海で、そこに親父がアオギスの台(脚立)を舟に積んで運んでいました。脚立を使うのは、人の気配を消すためです。アオギスは神経質で、水深1〜1.5mにいるため人影が見えたり音が聞えると寄ってきません。

脚立を舟で運んで釣り場で船頭が下ろしてから、お客さんを脚立に移すの

ですが、これが大騒ぎでした。釣り客はお年寄りが多い。普通の足場にさえ登れない人を脚立に乗せるわけですからね。脚立は六尺(約1.8m)ありました。お客さんは脚立の上から釣りをします。釣れているか釣れていないかは、脚立の上から海中にぶら下げる魚籠のありなしで見分けがつかず、魚籠が下りなければ船頭が場所を移動することもありました。

脚立の上で釣りをしながら寝てしまいい、海のなかに落っこちてしまうお客さんもかなりいたんです。当時は鉄道がないので前夜にタクシーで来るしかない。夜の8時ごろ舟宿に到着して仮泊するわけですが、舟宿で一杯飲んで騒いでいるうちに「じゃあ、ちよっと遊びに行こうか」と。洲崎(遊郭)がすぐそばでしたから、行ったり戻ってこなくて朝帰り。だからついつい居眠りをして海にドボンです。

昔、ここには舟宿が何軒もありました。そのうちの軒「遠州屋」には小説や映画になった伝説の相場師も来ていて、年間たった10組のお客さんで経営が成り立ったそうですから、当時のアオギス釣りは粋な遊びだったのでしょうか。



三ツ木さんが骨董屋で買い求めた脚立釣りの像

取材協力:有限会社 深川富士見 東京都江東区古石場2-18-5 Tel.03-3641-0507



編集部体験



外来魚

釣つて食べて学ぶ 外来魚

海外から人の手によって移入された魚を「外来魚」と呼ぶ。1925年(大正14)、釣りの対象および食用として神奈川県の芦ノ湖に導入されたブラックバス(オオクチバス)が有名である。こうした外来魚による在来種や生態系への影響が問題視されるなか、日本各地で外来魚を釣つて食べている若者がいる。「五感を通じて生物を知る」をモットーとするライターの平坂寛さんだ。「珍生物ハンター」を自称する平坂さんは、なぜそのような活動をしているのだろうか？

インタビュー

平坂 寛さん

珍生物ハンター/ライター

Hiroshi Hirasaka

1985年長崎県生まれ。琉球大学理学部海洋自然科学科卒業。筑波大学大学院生命環境科学研究科環境科学専攻博士前期課程修了。大学院在学中にライターとして活動を開始。珍生物を自ら探し、捕らえ、味わい、その体験をWebサイト「デイリーポータルZ」などで発信。著書に「外来魚のレシピ〜捕って、さばいて、食べてみた」「深海魚のレシピ〜釣って、拾って、食べてみた」「喰ったらヤバいいきもの」がある。



1



3



2



5



4

ブラックバスから
学んだこと

釣りを始めた時期を教えてください。

小学校5年生です。物心ついたころから魚や昆虫を捕まえるのが好きな子どもでした。生まれ故郷の長崎には釣りに適した川がないので、自然が好きなお父と佐賀の川まで行き、網で魚を捕るのが楽しみでした。

5年生のときに、母の知り合いの留学生が簡易的な釣り竿をくれました。海に持って行って試してみると、簡単に8cmほどの魚が釣れたのです。「釣りつてずらい!」と思いました。網では小さな魚を捕ることも苦労したのに、釣りなら簡単に大きな魚を捕まえられるのですね。エサでおびき寄せて釣で引っ掛ける。こんなはずらいテクニックが存在していたのかと、そのときの感動と衝撃で一気に釣りにはまりました。

外来魚との初めての出会いも
そのころですか？

それは中学校1年生のときです。やはり父が行った佐賀の溜め池に、それまで釣ったこともないような大きな魚がウヨウヨいて、これが

1「プレコ」と呼ばれるマダラロリカリア。南米原産のナマズの仲間。今、沖縄本島の川で大繁殖しているという 2北米原産のブラックバス(オオクチバス)を釣り上げた平坂さん。釣り少年の血が騒ぐ 3、4ブラックバスのフライと煮つけ。自身のブラックバスは外見に似ずとも美味。スズキの仲間と聞いて納得 5ブラックバスのうまさに思わずにんまり 6鶴見川に1年近く通ってようやく釣り上げた北中米原産のアリゲーターガー。これでも小さい方だという 7アリゲーターガーはうろこが硬くて剥がせないため、カセットコンロに網を載せて直火で丸焼きに 8アリゲーターガーを食べる平坂さん。微妙な表情をしているのは、身がバサバサしていて味も薄いから (提供:平坂 寛さん)



来魚のプレコが何百匹と群れていました。よく見ると、それ以外にもティラピアなど、日本の魚ではないものがたくさんいたのです。さらに大学だけではなく、沖縄全体がそうした状況でした。例えば那覇の国際通り付近の溝には、グッピーやナイルティラピア、コンピクトシクリッドなど、北米や南米、アフリカ原産の魚が多くいます。さまざまな本で生物の知識を仕入れていたはずなのに、まったく知りませんでした。

(注)二次淡水魚

真水に順応した魚。本来は海水魚だったが、地殻変動などによって内陸部に取り残された経緯から、短期間なら海水でも生存できる。メダカやカダヤシなど。

噂に聞くブラックバスかと。釣つてみると外見がそれまでに捕まえた魚とあまりに違ったので、「これ、うまいのかな？」なんて父と話しながら持ち帰って、ブラックバスということとは内緒で母にフライにしてもらったのです。それが、おいしくて。

そのときの僕はブラックバスの進化の歴史を味で読みとったのです。食べるという行為が「おいしい・まずい」だけではなく、なんらかの情報を得るきっかけになる」と初めて気づいた出来事でした。母と兄には後々ブラックバスだったということがバレて、「変なものを食べさせるな」と怒られることになったのですが。

とは決めています。父が古本屋を営んでいた関係で、幼いころから生きもの図鑑や写真集を眺めるのが何よりの楽しみだった僕は、色鮮やかで巨大な生きものがたくさん棲んでいるアマゾンなどのジャングルに、強い憧れを抱いていました。熱帯の生きものを研究したいと思ったときに、もっとも近いことをやっていたのが琉球大学でした。

当時の外来魚といえばブラックバス、ブルーギルということくらいしか報道されず、こうした真実は伝えられていなかったのです。その光景を見て、「もっといろいろな外来種が日本にいる現状を人々に伝える必要がある」と思ったことも、淡水魚の研究を選んだ理由です。

——平坂さんの「釣って(捕って)食べる」スタイルはいつから?

学生時代からやっていましたが、本格化したのは20代前半です。

佐賀ではフナを甘露煮で食べる文化がありますが、ブラックバスは川魚特有のくさみもなく、スズキやハタに近い淡白な味わいでした。それもそのはず、調べてみるとブラックバスは二次淡水魚(注)に分類される魚でした。味が海の魚に似ているのは至極当然のことなんです。

方向性を決定づけた
沖縄での光景

魚を研究対象に選んだのは、幼いころから親しんでいたのが魚だったこと、もう一つは、大学内の人工湖で衝撃的な光景を見てしまったからです。

大学院生のとき、研究の一環でブラジルのパンタナルという湿地帯に行きました。意気込んで釣りをしたところ、魚の力が強すぎて糸は切れるわ鉤は折れるわ、最終的にはリールまで壊され、コテン

——琉球大学では、なぜ淡水魚の研究を。

進学当初は、魚の研究をしよう

パンにやられました。それまで「釣りって楽勝」とさえ思っていたのに……。その悔しさで帰国後に本格的に釣りが勉強したのです。一方で、生きものの本を書くことが夢でもあったので、ウェブ媒体に記事を持ち込んで書かせてもらうようにもなりました。

食べることで 生きものを深く知る

——そもそも、日本にこれほど外来魚が持ち込まれた理由とは？

——すごく簡単にいうと「カッコいい」からです。外来魚の多くが観賞目的で持ち込まれています。わざわざ外国からコストとリスクを冒して連れてくるわけなので、見た目がいい、繁殖力が強い、おいしいなど何かしらの価値や魅力があったということです。

ただし、本来日本にいるべきではない生きものだから、釣り上げるたびに「お前を祖国で見かけた」と複雑な気持ちになります。

——これまでに何種類ほどの外来魚を釣って食べたのですか？

——自分で釣って食べたものは20種類ぐらいです。

——なぜ、食べるのですか？

——中学生のころにブラックバスを

食べて二次淡水魚というルーツに気づいたように、一匹の獲物から可能な限りの情報を得たいのです。そうすることで生きものをより深く知ることができそうです。

触るのはもちろん、毒がある生きものならわざと噛まれてみたり、針を自分の腕に刺してみたり、死なない程度に毒を受けてみる、食べていいものであれば食べるなど、できることは全部やります。食べておいしいかまずいかは、学要素が多いポイントでもあります。

——これまで食べた外来魚のなかで、特においしかったものは？

——ブラックバスはおいしかったです。そのほかでは東南アジア原産のウォーキングキャットフィッシュです。ウォーキングキャットフィッシュは、その名の通り「歩く」のです。正確には「這う」ですね。水場が干上がると陸を這って別の水場へ移動します。環境の変化に強く丈夫なので、世界中で養殖されています。

——本来食用なので脂がのっけていて、蒲焼きにすると抜群にうまいです。現地では蒲焼きやカレーに入れて食べるほか、甘辛いたれで焼いたものが屋台で売られています。

——そうそう、魚ではないですが、カミツキガメを釣って食べたたら

でもおいしかったですよ。

——ご自身のなかで食べ方のルールはあるのですか？

——生きものの本来の味や食感を知りたいので、最初はできるだけプレインな方法で調理します。海の魚は刺し身で食べますが、川魚は体内に危険な寄生虫がいる場合が多いので、刺し身ではなく塩焼きやソテーに。まずかつたらフライや

煮つけなどおいしく食べる方法を考えます。捕まえた者の責任として、「捕ったら完食する」というところが大前提なので。よく誤解されるのですが、お腹を満たすために食べているわけではありません。多くの外来魚は独特のくさみや酸味などがあるため、和風の調理法が合いません。しかし、原産国で用いられている調理法をまねす



1 沖縄で釣り上げた東南アジア原産のウォーキングキャットフィッシュ。左のマーブル個体、右のアルビノ個体ともに人為的に生み出された「変異個体」。かつて観賞魚市場に出回ったものが遺棄され沖縄で野生化しているのだ
2 1週間ほど泥抜きをしてから調理する 3 ウォーキングキャットフィッシュの切り身。サケのように鮮やかなオレンジ色だが、個体によって色は大きく異なるそう 4 5 ウォーキングキャットフィッシュの蒲焼き。これほど蒲焼きに合う外来魚は初めてだと笑みを浮かべる平坂さん(提供:平坂 寛さん)

釣りとお外来魚

Q 特定外来生物とは？

A 外来生物(海外起源の外来種)であり、かつ生態系、人の生命・身体、農林水産業へ被害を及ぼすもの、及ぼす恐れがあるもののなかから指定されている。2018年5月時点で魚類はブラックバス(オオクチバス)など26種類が指定されている。

Q 特定外来生物は釣ってもよい？

A 釣りをすることはできる。禁止事項は、次の通り。

- ① 釣った魚を持って帰って飼うこと
 - ② 釣った魚を移動させて放流すること
- したがって釣った特定外来生物をその場で放す「キャッチ&リリース」は問題ないが、条例で禁止している都道府県もある。また、釣った特定外来生物をその場で締めたうえで、持ち帰って食べることも問題ない。

環境省HP「日本の外来種対策」、環境省・農林水産省パンフレット「外来生物法」を参考に編集部作成

「**駆除**」すべき？
外来魚をどう捉えるか

——外来魚に対して私たちはどのように考えるべきでしょうか。

外来魚は生物多様性を脅かす要因の一つですが、彼らは人間によ

ると、見違えるようにおいしくなります。食用で持ち込まれた外来魚もいますが、外国の川魚を食べるなんて普通に考えればかなりの冒険ですよね。安易に食材として連れてきて、現地の調味料や調理法、つまり食文化も一緒に持ち込まなければ、日本の食卓に定着させるのは難しいと思います。

る無理な導入の被害者です。よって「罪のない魚を駆除すべきでない」との論調もありますが、それは間違いです。辛い思いをしてでも駆除するのが、連れてきたわれわれ日本人の責任です。

ただし、「何が何でも駆除すべき」と決めつけるのが必ずしもいいとは限りません。特に、義務教育課程の子どもが学校でそう教われば素直に受けとってしまいます。子どもたちには、なぜ駆除が必要なのか、ほんとうに駆除が必要なのか、駆除する以外に道はないのかというのを、自分の頭で考えてほしいのです。そのためには、まず興味をもつことが大切です。

だから僕は、エンターテインメント性のある「釣って(捕って)食べる」ということを続けています。学校の勉強とはまた違った柔らかな切り口で、おもしろおかしく外来魚のことを伝えることにしました。「こんなのが日本にいるんだ？」「おいしそう！」など、少しでも多くの人が外来魚に興味をもつ入口になればうれしいです。

それに釣って食べることは、罪悪感なくいろいろなことを学べます。例えばブラックバスを釣ってその場で駆除するところを子どもには見せたくないですよ。命を

ただ奪うだけですから。だから釣って食べるということは、子どもにとっても意外にいい落としどころなのです。外国の魚を捕まえた経験をより特別なものとして記憶に残すためにも、お勧めしたいです。

——平坂さんにとって水辺とは。

「学校」のような存在です。学校といっても、小学校や中学校かな。

例えば、真冬の山は動物も冬眠していて生きものの好きの僕には少し寂しいのですが、水辺に行けば

どんなに寒い時期でも水鳥や魚など何かしらの生きものが出て見えます。学校も同じで、行けば友だちがいて、新しい学びや経験にワクワクしますよね。

今後やりたいことは、「水辺をフィールドにした少人数制の野外活動」です。外来魚に興味をもってもらうには直接ふれあっていたかくことが一番ですし、何よりも本で見るとは違って、何よりも本で見るより、本物を捕まえるのは楽しいですよ！

(2018年4月27日取材)



8 特定外来生物のカミツキガメも何度か釣っている。平坂さんいわく「ものすごくおいしい」。ただし、カミツキガメの捕獲には危険が伴うので、まねしない方が賢明だろう。9 カミツキガメの唐揚げ。大きな爪が主の痕跡をとどめている



6 「プレコには『怪獣的なかつこよさ』がある」と平坂さん。たしかに魚とは思えないシルエツだ。7 プレコを用いた「ペイヤダ」。原産国の調理法で料理すると失敗が少ないという



外来魚



科学

魚は釣られたことを覚えている？

「魚と人の交差点」を探る

人と魚の間で繰り広げられる釣りという営みを、魚目線で見つめ直してみよう。そう考え、過去の論文や学術研究の成果をもとに、釣り人の役に立ちそうな情報をWebサイトでわかりやすく伝える研究者がいる。動物搭載型の行動記録計（データロガー）を使って野外での魚の生態を研究する吉田誠さんだ。若き現役研究者に、科学と釣りの関係や共通点などを聞いた。

インタビュー

吉田 誠さん

国立環境研究所
生物・生態系環境研究センター
特別研究員

Makoto A. Yoshida

1987年香川県生まれ。東京大学農学部卒業。2017年9月に東京大学大学院農学生命科学研究科水圏生物科学専攻博士課程修了。博士（農学）。専門は動物搭載型の行動記録計（データロガー）を使った魚の遊泳行動に関する力学的な解析と野外での魚の生態研究。2018年4月から現職。滋賀県琵琶湖環境科学研究センター内の国立環境研究所琵琶湖分室に勤務。釣りを科学するWebサイト「スマルア技研」にて、魚の生態を読み解く記事を連載中。

<https://labs.smartlure.co/category/biology/>

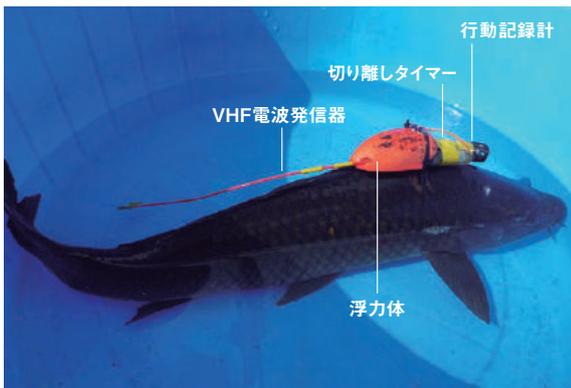
「バイオロギング」で魚の行動を探査

小学校に入る前から魚に興味がありました。図鑑で色とりどりのさまざまな形をした魚を見るのが好きでしたし、夏休みに香川県で祖父の海釣りについて行くのも楽しかったです。中学生のころには将来、魚の勉強をしたいと決めていて、大学で魚の行動研究に携わりました。遊泳速度、水温、深度などを測定できるセンサーの付いた行動記録計を魚の体に装着し、切り離し装置を使い回収して、水中での魚の行動や生態を探る「バイオロギング」という手法を使った研究です。

対象とした魚はアメリカナマズ。正式名称はチャネルキャットフィッシュユといつて北米では人気の魚ですが、1970年代に日本へも

釣り上げられたイワナ。この経験を魚は覚えているのだろうか





(上) 行動記録計などを装着して放たれたアメリカナマズ(チャネルキャットフィッシュ)。一定期間が過ぎると装置のみ切り離され、水面に浮上した装置を回収する (下) 吉田さんが研究に取り組んでいる、希少な日本在来のコイ

食用で輸入され養殖されたものの、あまり売れなかったようです。そのとき野外に逃げ出した個体が各地に定着し、現在は特定外来生物として駆除の対象となっています。研究でわかったのは、湖と川ではアメリカナマズの生活のしかたが違うこと。霞ヶ浦のような富栄養の湖では泥底にハゼやエビなどエサが豊富にいたので、アメリカナマズは基本的に湖底で暮らしています。一方、川では流れてくるエサを食べるために、川底を離れて泳ぎ回ることが多い。ですから、楽に泳げるよう、浮き袋に空気を十分に溜めて体を軽くしています。湖底にいるアメリカナ

マズが浮き袋の空気を少なくして体を重い状態にしていると対照的です。こうした行動がわかると、富栄養の湖では底引き網でさらい、川では中層に網を浮かせた方が効率よく捕獲できるというふうに加除にも役立ちます。今年度から赴任した国立環境研究所琵琶湖分室では、琵琶湖にすむ2種類のコイの行動を探っています。日本在来のコイは国内で琵琶湖にしか残っていません。実は、全国で広くみられるコイは大陸由来の外来コイが放流されたものです。私はコイでもやはり浮力という観点に着目しました。浮き袋周りの構造を比べると、在来コイの

方が外来コイより発達していることから、水圧の高い、深いところでも暮らせるのではないかと、逆に外来コイは深いところに行けないのではないかと、という仮説を立て、コイに行動記録計を付けて放流し、検証しているところです。

溪流の釣り堀で一人だけ入れ食いに

私はもともと、釣りに役立つための研究をしているわけではありませんが、魚の行動研究で蓄えた知識が現場で活かせてうれしかった経験があります。奥多摩の溪流釣り堀でのこと。ニジマスの釣り場です。同じエサと竿を使っていた他の人を差し置いて、私一人だけ次々と釣り上げたのです。

試してみたのは簡単なコツ。人氣のない場所を選び、エサを投入したらすぐに下流へ歩き出し、川の流れに乗せて仕掛けを流してみました。これを繰り返すと、ほぼ2投に1投くらいのペースでニジマスが釣れました。

同じ場所にとどまって釣っていると、竿と糸の長さの範囲でエサは止まってしまいます。サケ科の魚は流れてくるエサを食べる習性があると知っていたので、流れの

なかで不自然に動いたり静止するエサには警戒心が働くと予想できました。そこで、上流からエサを川の流れに乗せて漂わせれば、ニジマスがパクッと食いつく可能性が高いと考えたのです。一人で20匹近くも釣って、とても注目を浴びました。たまたまその日は雨で、多くの釣り人が橋の下に陣取っていたので、下流の方には誰もいなくて、歩きながら釣れたのもラッキーでした。

私自身はどちらかといえば、川釣りよりも海釣りの方が好きです。何が釣れるかわからないおもしろさがあるから。釣り上げたときの魚のきらめき、躍動感になんともいえぬ魅力を感じます。魚をたくさん秘めているゆりかごととして、海にちよっとお邪魔している、という感覚です。釣りの本質は、水中に思いを馳せる、魚に思いを馳せる営みではないでしょうか。本来ならふれあえない生きた魚と人がふれあえるのが釣り。釣りは「魚と人の交差点」だと思います。

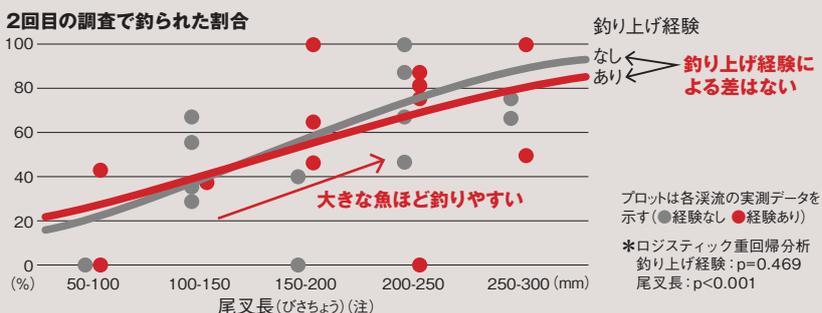
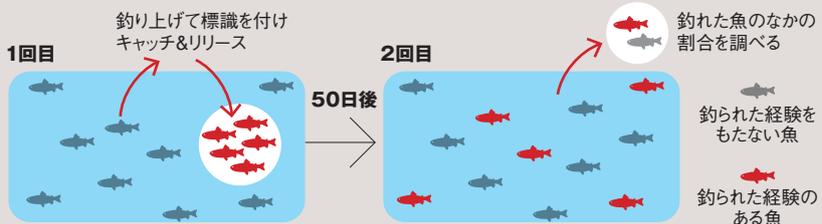
釣られやすい魚はほんとうにいるのか？

釣りに関する興味深い先行研究の一つに、魚が「スレる」(賢くなっ

自然溪流におけるイワナの釣られやすさ

坪井潤一さんたちが北海道南部の自然溪流でイワナを釣り、残りのイワナもすべて採捕。両者に別々の標識を付けたあと放流し、約50日後に二度目の調査を行なったところ、釣られた経験の有無によって個体の釣られやすさに

差は出なかった。「魚の釣られやすさには個体差がある」という第一の仮説も、「魚は釣られたことを覚えている」という第二の仮説も当てはまらない。ちなみに、大きな魚ほど釣れやすく、成長率も高いとの結果も得られた。



吉田誠さんが下記の論文から作図したものを参考に編集部作成
 「キャッチアンドリリースされたイワナの成長・生残・釣られやすさ」(坪井潤一、森田健太郎、松石隆)
 日本水産学会誌68巻2号pp.180-185 (2002)

て釣りにくくなる)原因を探究したものがありません。スレに関しては、古くから二つの説が知られてきました。第一に「釣られやすい魚と釣られにくい魚の個体差がある」。釣られやすい魚が先に釣られ、警戒心の強い魚ばかりが残るため、最初に比べて釣れにくくなる、という仮説です。第二に「魚は釣られたことを覚え

ている」。一度釣られてリリースされたり、鉤から逃げたりした魚がその体験から学習し、次には釣り鉤を回避するようになる、という仮説です。これらを検証した過去の研究を総合的に振り返ってみると、個体差の有無、学習経験の有無、どちらに関しても正反対の結論が出ている論文があるのです。つまり、

実はそう単純な話ではなく、答えは一つに決まらない、というのが実状です。

さらに、大半の研究は室内の水槽を使った飼育実験です。だから野外でも同じ結果になるとは限りません。実際の生息環境では、他の魚とのエサの取り合いがあったり、そもそもエサが少ない環境であるとか、生存競争で小さい魚が大きい魚に食べられているといった多種多様な条件がそのつど重なるので、結果が変わってくる予想できます。

このように魚の研究は一筋縄ではいかないところがおもしろい。釣り人側からすると、答えがないと言われると、がっかりするかもしれないませんが、科学的な見地に立つと、やはり一つひとつ細かい状況を解きほぐしていくことが大切なのです。

釣り人は科学者と同じことをしている

魚のスレに関してもこのようにあいまいなのですから、一般的な「必釣法」はありません。おそらく釣りが上手な人には「こうすれば釣れるはず」という柱が自分のなかにあって、その柱が無意識の

うちにその日ごとの条件に最適化されているでしょう。

それは言語化されない経験に裏打ちされています。例えば今日は曇りだから魚が浮いてきているだろうとか、晴れているから日陰を狙ってみようというようなことです。具体的にどの魚がどの明るさの場所を好むか、ということを厳密に知らなくても、経験上から無意識に判断しているはずなんです。

疑問に対し仮説を立てて検証し、結果を踏まえて新たな仮説を立てる。研究はこのプロセスの繰り返しですが、釣り人がしていることもおそらく同じです。なんとなく「ここかなあ」と思って釣ったら釣れた、というような雰囲気だけに頼ると、「この場所は釣れる」という間違った思い込みに陥ります。ところが、ほんとうは流れの強さ、天候、エサや天敵の有無……さまざまな条件が合った結果、へたまたまそこで釣れただけかもしれない。

腕のいい釣り人はこうした偶然を鵜呑みにすることなく、なぜ釣れたのかをきちんと分析して解釈し、新たに仮説を立てて検証することを無意識にやっているのです。この点では、釣りはまさしく科学的な営みだと思えます

(2018年4月11日取材)



科学

(注)尾又長
 魚の上アゴの先端から尾ビレが二つに分かれた中央部のもっともへこんだ部分までの長さ。



ごみを拾う釣り人たち

琵琶湖で始まった新たな交流



琵琶湖はバイカル湖やタンガニカ湖などとともに世界的に有名な古代湖であり、ここでしか見られない固有種も多い一方、外来魚のブラックバスを狙う釣り人の姿は絶えない。今、「ごみ拾い」をきっかけに、釣り人たちと環境保全に取り組む人たちとの間で、かつてない交流が生まれている。

激論を経て見えた 釣り人がすべきこと

「店長はね、長めの竿を使って、きれいなサイドスローで投げるよ」
そんな釣り仲間の言葉を思い出しながら、琵琶湖南端の釣り場で、京都市の釣具店「バスワールド」の店長、川村岳大たけひろさんの姿を探した。川村店長が積極的に行なってきた、琵琶湖の釣り人のマナーアップのための活動について聞いたためだ。

釣り場では「釣り人が居れば水辺は綺麗になる。」という言葉が印刷したごみ袋を配る活動も行なっているとも聞く。それも見てみたかった。

ほどなく川村店長を発見。前日の「淡海あうみを守る釣り人の会」(後述)の清掃でも会っていたが、湖面を見つめる鋭い目は、そのときは様子が違った。

川村店長が「バスワールド」をオープンしたのは1999年(平成11)のこと。独学で始めたバス釣りに夢中になり、勢いで店を開いたのだという。当時は90年代に盛り上がったバス釣りブームが勢いを失っていった時期。周囲からは「ビジネスとしては厳しい」

写真：滋賀県大津市の唐橋公園付近で行なわれた「淡海を守る釣り人の会」主催の「第13回 釣り人による清掃活動」



1



2



3



4

1 3 ほぼ毎日琵琶湖に通う川村岳大さん。この日も開店までの数時間、バスを狙ってルアーを投げつつ、ごみを拾う。腰に括りつけているのがオリジナルのごみ袋 2 釣り人のマナーアップのために、川村店長が配布するオリジナルごみ袋と携帯用灰皿。取材中に一人の釣り人がごみ袋を持ち帰った 4 撮影中、体長50cmのバスを釣り上げた川村店長

と忠告を受けたが、やってみたいという思いが勝った。

開店から4年が経ったころ、琵琶湖のバス釣り界を揺るがす事態が起こる。「滋賀県・琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例」(通称・リリース禁止条例/略称・リリース禁)の制定である。

バスに代表される外来種が与える琵琶湖の生態系への悪影響が深刻化しているとして、さらなる駆除が求められることになり、釣り上げた際のリリース(川や湖に放すこと)が禁止されたのだ。これにより、琵琶湖でバスを釣った場合は、持ち帰る、もしくは回収ボックスに廃棄しないといけなくなった。

この「リリース禁」制定前後は、漁業関係者ら条例に賛成する者、バス釣りを好む釣り人ら条例に反対する者の間で議論が過熱した。

「僕もインターネット上の掲示板などで、実名を出して意見を表明していきました。僕の立場は少し特殊で、バス釣りを誰もが楽しめる環境は守りたいと思っていたので(リリース禁)には反対。でも、釣り人側からの生命倫理、つまり『かわいそうだ』といって駆除を否定する声も違うと。釣りで釣りに傷つけている以上、僕らもバスを傷つけていたんですから」

賛成派と反対派の間に深い溝を残したまま「リリース禁」は施行された。多くの釣り人にとって納得のいかない結果となったが、川村店長は落胆することもなく今後を見据えた。議論を通じ釣り人側が取り組むべき課題が見つかったからだ。

「釣り人が出すごみの問題がバス釣りのイメージの悪化を招いているのは間違いありませんでした。ここをちゃんとしない限り、今後どんな意見も通らないと思ったんです」

川村店長は「釣り人はごみを拾うもの」をごくあたりまえにすること、そのうえで釣り人以外の多くの人に知ってもらうことが大事だと考えた。そして釣り竿を持ち、ライフジャケットを着用して、明らかに釣り人だとわかるスタイルで清掃活動を開始することにした。さらに前述の「釣り人が居れば水辺は綺麗になる。」というキャッチコピーを印刷したステッカーやごみ袋の販売も始めた。

こうした取り組みは徐々に釣り人の間で知られるようになった。ごみ袋には釣り具メーカーから協賛を受けており、「釣り人はごみを拾うもの」という新たな常識は少しずつ定着していった。

釣り人のアウェーに 飛び込み広がった世界

そんな川村店長の活動に影響を受け、行動を起こした人がいる。バス釣りを愛し、大阪から足しげく琵琶湖に通っていた津熊操さんだ。

津熊さんは釣り仲間と2人で清掃活動を始めた。2カ月に一度、琵琶湖の釣り場でごみを拾っていくというものだった。

「川村店長の活動を参考に、釣り人だとわかるスタイルでごみを拾いはじめたんです。当初は呼びかけがうまくいかず、参加者は数人という、規模の小さなものでした」

津熊さんたちは、活動をもっと多くの人たちともに行ないたいと考え、より積極的に呼びかけていった。そんな方針が、思わぬ出会いを引き寄せる。

国土交通省が管理する施設で、琵琶湖や河川に関する情報収集・提供を通じて近隣住民との交流を図っている「ウォーターステーション琵琶」に勤務する武田みゆきさんは、津熊さんからのメールを受け取ったときのことを振り返る。「私たちはSNSで日々の琵琶湖の水位や放流量をアナウンスして

いるのですが、それは釣りをする際の情報源にもしていただいていた。そんなこともあり、SNSで釣り人のマナーの問題を発信したことがあったんです。それを見た津熊さんから、一緒に清掃活動してもらえないかというメールが届いたので」

地域のための活動をしている人や団体が行政に協力を求めることは珍しいことではない。ただ、琵琶湖における釣り人という立場にある者が行政にアプローチしてくるケースは、当時ほぼなかった。「リリ禁」を巡る紛糾は釣り人たちに「招かれざる客である」という疎外感を与えていた。武田さんは続ける。

「（リリ禁）以降の釣り人と行政の関係はギクシャクしていて、行政側も多くの人がこの関係を変えていけないかと考えていました。だから、釣り人が頼ってくれるのを待っていたところがあったんです。自分たちの仲間のマナーの悪さを指摘されるかもしれない人にかかわっていくのは、勇気が必要だったはず。そんななかで津熊さんたちは一歩を踏み出してくれたんです」

心意気に打たれたウォーターステーション琵琶は協力を快諾。つ



1,2 琵琶湖畔を清掃する釣り人たち。大人に混ざって奮闘する子どもの姿も 3 「淡海を守る釣り人の会」の皆さん。左から武田みゆきさん、田城愛さん、代表の津熊操さん、辻本純成さん、勝山裕之さん 4 「淡海の川づくりフォーラム」でプレゼンする津熊さん（提供：淡海を守る釣り人の会）





「第13回釣り人による清掃活動」に参加した釣り人たちと収集したごみ類。そのほとんどが生活ごみだった。川村店長も毎回参加している(最前列の左から3番目)

ながりをもつ団体に声をかけ、津熊さんたちの清掃活動への参加を促した。参加者は26名に膨らんだ。「釣り人のマナーに厳しい目を向けていると思われる団体も参加しただけだったので、ありがた

く思うのと同時に「厳しいことを言われるかもしれない」という不安もありました。『絶対怒られるやん』って(津熊さん) だが、ともに清掃活動を行ない、琵琶湖への思いを語り合ううちに理解は深まった。

釣り人が決して招かれざる客ではないということ、津熊さんたちは知ることとなる。 その様子を見ていた武田さんは、津熊さんたちの背中をさらに押した。滋賀県が主催するイベント「淡海の川づくりフォーラム」に参加し、釣り人たちの思いをより多くの人に届

けないかと提案したのだ。 今度は津熊さんたちが行政の心意気にこたえた。慣れぬプレゼンテーションでこれまでの活動を紹介し、釣り人の琵琶湖への思いを伝えた。 「フォーラムはコンペ形式で、そうしたものには慣れた活動歴の長い団体の発表も多くあったのですが、津熊さんたちはそれを上回る評価を受け(マザーレイクフォーラム賞)を受賞したんです(武田さん) 決して流暢ではなかったというプレゼンテーションに高い評価が与えられたのは、琵琶湖の環境を考える人々の、釣り人への期待と関心の表れだった。

釣り人が果たせる新しい役割を模索

このイベント参加を機に、津熊さんたちは団体名を「淡海を守る釣り人の会」とした。清掃活動の規模を大きくしていくとともに、さまざまな立場の人々と交流しながら、釣り人が琵琶湖のために果たせる新たな役割を模索している。 なお、バスフィールドの川村店長も清掃に参加し、津熊さんたちの大きく広げていく活動をサポートしている。

淡海を守る釣り人の会の一員である田城愛さんは、これからのビジョンを語る。 「琵琶湖の様子の変化にいち早く気づくことができるのが釣り人。アオコや新しい種類の藻の発生を、いち早く琵琶湖博物館の学芸員に伝え研究に活かしていただけたケースもあります。釣り人が水辺に立ったり、ボートで湖上に出たりして得た情報が、琵琶湖のために活用されるしくみをつくれなにか。そんなことも考えているんです」 利害や意見の相違などを整理した情報は物事を捉えやすくする一方で、先入観を生み対立を深めることもある。「娯楽の場を守ろうとする釣り人」「それを苦々しく見る住民」「規制する行政」――。琵琶湖の釣り人が感じてきた疎外感は、こうした構図の独り歩きがもたらしたものであったように思う。

だが、異なる立場の人たちとも臆せず交流し、釣り場の美化に努め、釣りで得た情報を社会のために活かすといった新たな役割を担ってみせようとする釣り人たちには、そんな構図をいとも簡単に壊してくれそうな、前向きさとエネルギーがあった。

(2018年4月15・16日取材)



環境



文化をつくる

「釣る」だけではない「釣り文化」

編集部

釣りの魅力は 静寂と興奮の落差

「一時間、幸せになりたかったら酒を飲みなさい。三日間、幸せになりたかったら結婚しなさい。八日間、幸せになりたかったら豚を殺して食べなさい。永遠に、幸せになりたかったら釣りを覚えなさい。」

これは作家の開高健がアマゾンで60日かけて巡った釣り紀行『オーバー!』（集英社1978）に記した中国の古諺だ。釣り人の間でよく知られているが、開高自身は「引用元はわからない」とも記している。40年経ってもこの文言が流布しているのは、釣りの魅力をよく表しているからだろう。

開高と親交が深く、釣り名人として名高い尺八奏者・作曲家の福田蘭堂、さらに作家の井伏鱒二や幸田露伴など釣りに熱中した文化人は枚挙に暇がない。そして、釣りはしばしば人の生き方も変える。バスフィッシングにハマり、京都駅そばで営んでいたたこ焼き屋を畳み釣具店を開業した川村岳大さん（p.31）、釣りを始めて交友関係が広がったピーター・フランクルさん（p.

10）、和竿の釣り味に魅了され、自分でつくるようにもなった三ツ木新吉さん（p.18）。皆、釣りの魅力を熱く語ってくれた。それほどまでに人を熱中させる理由について、評論家の森秀人は「たぶんそれは、釣りが魚捕り以外の大きな魅力を備えているからに違いない。釣りは緊張、陶酔、解放という興奮回路の繰り返しである」とかつて述べた。大岡玲さんが「ひとしずく」（p.2）で見事に表現しているように、静寂のなか、水のなかから身を躍らせて魚が食いつくその瞬間の興奮が、釣りの魅力なのである。

釣り人と魚、 水との関係

釣りという行為を測れば、博物館に獣骨や石を用いた釣り鉤（かぎ）が展示されていることからわかるように、そもそも古代に生まれた狩猟方法の一つだ。

魚類学者・末広恭雄の著書『釣ろう・釣る・釣れた―釣魚生態学―』（二見書房1976）によると、魚を獲るためにまずヤス（釣針）が、次いで釣りが生まれ、そのあとに網が発明された。縄文時代晩期、東北地方では釣

り鉤によるマグロ漁が盛んだったし、『古事記』に出てくる神話「海幸山幸」では火照命の持つ釣り鉤から物語が進んでいく。時代が下ると、釣りは食料を得る手段から徐々に趣味の色彩を強めていった。江戸時代に釣りが盛んになった経緯については、長辻象平さんが詳らかにしたとおりだ（p.6）。

元來食料の調達手段なので、釣りには魚という獲物を食す楽しみがある。しかし、空腹を満たすだけではなく、知的好奇心を満たす存在でもあると平坂寛さんに教えられた（p.24）。

釣りは一筋縄ではない。初心者でもあつけない釣れることがあるし、ベテランが手を尽くしても釣れないこともある。人間は魚が棲む水のなかをありのままに見ることはできない。それゆえ釣り人は知識や経験を照らし合わせて魚の状態を想像し工夫する。腕利きの釣り師は科学者と同じ行為をしている、現役の研究者、吉田誠さんは指摘する（p.28）。

釣り人が「釣りに行きたい」と思うとき、水際に立つ自分や水辺の風景を夢想している。そんな「釣りを通じて生まれる人

と水の関係性」を明快に語ってくれたのは「テンカラ大王」と石垣尚男さんだ（p.14）。

「私のように長い間釣りをしていると、『魚を考えることは水で考えることだな』と思うようになります。そういう意味で、釣り人も『水』や『水の文化』にかかわる一員だと思えます」。

釣り人が担う 社会的役割

では、釣り人は今どれくらいいるのか。総務省が「平成28年社会生活基本調査」を踏まえて公表した「釣りの行動者数」によると、過去一年間に釣りをした15歳以上の人は887万2000人。子どもの数を含めればもう少し多いだろう。

この約900万人もの釣り人が、自然の恵みを受取るだけでなく、仮に社会的な役目を担う存在となればインパクトがありそうだが、それにはどんな方法があるのだろうか。

ごみ拾いをきっかけに釣り人と地域住民の交流が始まっている琵琶湖（p.31）では、釣り人が発見した異変を研究者に伝え、サンプルも採取して手渡したという話を「淡海を守る釣り人の

会」の皆さんに聞いた。釣り人は水辺にいる時間が長く、定点観測しているのが異常に気づきやすい。護岸工事のあとにタナゴがいなくなった、という話も琵琶湖で耳にした。ビッグデータの蓄積や分析が進む現代社会で、魚や水質、植生など水辺にかかわる情報を釣り人たちが提供することは、釣りに新たな色相を加えることになるだろう。

また、こうした釣り人が増えることで水や水辺、魚という生物資源が守られる可能性もある。釣り上げた魚を再び水に戻す「キヤッチ&リリース」は比較的新しい釣りの概念だが、これを「釣りは結果よりも過程を楽しむもの」という釣り人の意識が変化したことの発露と捉えるならば、こうした新たな概念は今後も生まれうる。「釣り人はごみ拾うもの」を当然のこととする人たちが、すでに現れているように――。

狩猟から趣味へと移行した釣りは、習得・共有・伝達されて文化となった。この先、社会的な役目も担うとすれば、釣り文化はより重層的なものとなるし、その兆しは見えている。

メコン川は流れる

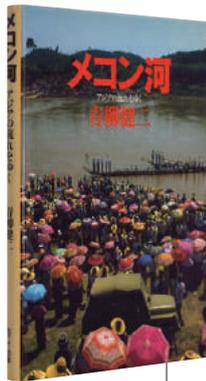
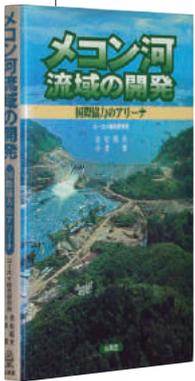
メコン川の三つの顔

日本リーダーズダイジェスト社発行『世界の大河―歴史とロマンを求めて』（1980年）では、伴野朗はメコン川には、三つの顔があるという。①チベットの高山から生まれ出た神秘を浮かべた顔、②インドシナ半島の「母なる大河」として穏やかな微笑みを浮かべた顔。生活、農業、都市、宗教、文明そして大地そのものまで、インドシナ半島はそのすべてをこの川に負っている。③メコン川には憂いを帯びた顔がある。メコン川はその豊かな流れゆえに、人間たちの争奪の場となる。インドシナ戦争、ベトナム戦争、カンボジア内戦、中越戦争などで政治的、民族的な対立紛争が続いたからである。

この書によりメコン川の流れを追ってみたい。遠くヒマラヤ山系チベット高原の海拔5000mの源から発するメコン川は、南に流れて中国雲南省を過ぎ、やがてミャンマー、ラオス国境に出る。激流が岩を咬み、岸を穿ち、峡谷を侵し、急勾配を砕けながら流れ落ちる。やがてゆるやかな流れとなり、ラオス、タイ国境を南に、さらにラオスの旧王都ルアン普拉バンを過ぎ首都ビエンチャンに出る。さらにラオスの西南端を横切り、滝となってカンボジアに流れ込む。

カンボジアの首都プノンペン付近で、内海のようなトンレサップ湖に通じる水路と合流し、ベトナム南部に広大で肥沃なメコンデルタを形成する。こうしてメコン川は大きな九つの河口から膨大な水と土砂を南シナ海に吐き出している。中国、ミャンマー、ラオス、タイ、カンボジア、ベトナムの6カ国を流れる国際河川である。ラオス、タイ、カンボジアの一部はこの川が国境をなしており、このことから、昔から戦乱が絶えない。

モンスーンの気候によって季節的にメコン川の水位は増減する。夏には高水位となり、10月下旬水が引き始め、最低水位は3月、4月となる。メコン川の諸元は全長約4350km、流域面積約81万km²、年間最大流量5万2000m³/s、年間最小流量1750m³/sである。



メコン川を下る



古賀 邦雄

こがくにお

古賀河川図書館長

水・河川・湖沼関係文献研究会

1967年西南学院大学卒業。水資源開発公団（現・独立行政法人水資源機構）に入社。30年間にわたり水・河川・湖沼関係文献を収集。2001年退職し現在、日本河川協会、ふくおかの川と水の会に所属。2008年5月に収集した書籍を所蔵する「古賀河川図書館」を開設。平成26年公益社団法人日本河川協会の河川功労者表彰を受賞。

青柳健二著『メコンを流れる』（N.T.T出版・1996年）、同著『メコン河 アジアの流れるゆく』（N.T.T出版・1995年）は、ともに源流域中国から河口メコンデルタ地域まで豊富な写真で捉えている。

源流中国青海省・雲南省の印象を龍神舞い降りる天空の大地を発つと表現する。メコン川流域では雲南省南部からカンボジアまで、主な宗教は南方上座部仏教である。4月中旬の暑い時期にタイ民族の「水かけ祭り」が繰り広げられる。自転車に乗った人の子がにこやかに水を掛けるシーンは和やかな光景である。中流域ミャンマー、ラオス、タイを慈しみの島、そして精霊の滝へとして、ラオス南部カンボジアの国境に近いソンプミットの滝を写す。このあたりは早瀬、滝、島などが多い。またコーンパベットの滝は、メコン川本流で最大の滝で、落差約15m、幅300mを誇り、上流、下流の往来を妨げている。

メコン川はこのあとカンボジアを流れていく。カンボジアの流れについて、水神走る、祭りの狂熱に酔うと表す。カンボジア各地の予選大会で勝ち抜いたボートがプノンペンに集まり、レースを行なう。ボートには蛇神ナーガをかたどっている。ナーガは人間に恵みをもたらす雨や水を司る神である。水祭りは、人々に豊かな作物や川にもたらしてくれる水に感謝する行事である。

菅洋志著『メコン4525km』（実業之日本社・2002年）は、中国、ミャンマー、ラオス、タイ、カンボジア、ベトナムの国々の流れに沿って撮っている。麗江はナシ族の住む町。すばらしい疎水が巡らされている。疎水の利用法は早朝に飲み水を汲み、次に野菜を洗う。午後には洗濯、夜には汚水を流す。一晩経って朝には再びきれいな水河の溶け水が流れてくる。

ミャンマーでは一面に広がる整然とした田圃の淡い緑、目を見張る美しさ、かつて世界一の米の輸出国であった面影を残す。ラオスではコー

ンパベンの滝で捕れたオオナマズがリヤカーで運ばれている。体長2m、体重100kgを越すという。

タイでは、象とのつながりが深く、戦争では象も一緒に戦っている。近年森林伐採に利用されていたが、タイでの森林伐採禁止によって象たちの働き場がなくなったことを捉える。カンボジアでは、トンレサップ湖から流れるトンレサップ川とメコン川が合流するところに首都プノンペンがある。雨季になるとメコン川の水がトンレサップに向かって逆流し、アジア最大の湖まで広がり、魚も増え、人々に豊かな恵みをもたらす。

メコン川の最終点はベトナムのカントー付近で川は三本に分かれ、湿地帯を形成し、豊かな大地の実りと漁場をつくる。そこに無数の船が行き交う。乾季になると川の水は塩っぱくなる。逆に雨季にはメコンの水が流れ込み、ミルク紅茶の色から黄土色に染まる。メコン川はさまざまな変化しながら長い旅を終える。

鎌澤久也写真・文『メコン街道 母なる大河4200キロを往く』（水曜社・2004年）は、メコンを下流域のメコンデルタから、上流に向かってカンボジア・アンコール遺跡群、ラオス・ナムグムダム、タイ・ゴールデン・トライアングル、ミャンマー・インレー湖、中国・青いケシの花などを源流まで追っている。

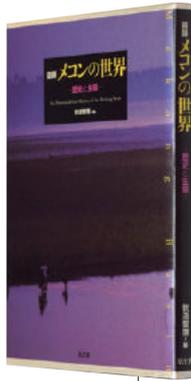
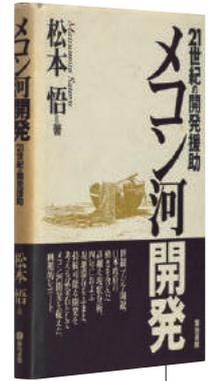
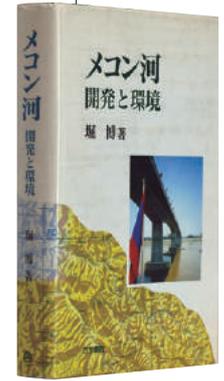
歴史紀行として石井米雄・横山良一著『メコン』（めこん・1995年）があり、ポール・ライイトフット著『メコン川』（帝国書院・1987年）は児童書である。

メコン川の開発

インドシナ半島に和平が訪れると、メコン開発はその地形と豊かな流量から、国際協力のもと、主に水力発電ダムの建設が進んだ。吉松昭夫・小泉肇著『メコン河流域の開発 国際協力のアーリーナ』（山海堂・1996年）は、メコン川の支流と本流での開発プロジェクトを紹介し、メコン川支流のナムグムダムの発電計画、そして、ナム・グム計画などを通じて体得した経験から国際協力を述べている。

ラオス領内のメコン川支流のナム・グム川に建設されたナムグムダム貯水池（1972年12月竣工）は、高さ70m、総貯水容量70億m³である。ダム直下に建設された発電所は150MWの設備容量をもつ。ここで発電された電力はラオス国内で消費されるほか、タイに輸出されている。ダムは発電のみでなく、洪水調節や灌漑にも役立っている。

堀博著『メコン河 開発と環境』（古今書院・1996年）は、実際にメコン川の開発に対し国連技師として従事したことから、多岐にわたって論じられている。その内容は第1章メコン川とその流域、第2章では、下流域のラオス、タイ、ベトナム、カンボジアにおける農業、森林資源、



水運、水力発電、第3章下流域のダム開発計画―その変遷と国際協力、第4章上流 蘭倉江とその本流ダム開発、第5章ダム開発の環境問題―熱帯大陸河川の場合、第6章新メコン委員会の設置と今後の開発を論じ、メコン川流域の持続的開発のための協力に関する協定も掲載されている。メコン開発に関するバイブルとなっている。

松本悟著『メコン河開発 21世紀の開発援助』（築地書館・1997年）は、ラオスに建設されたナム・グム第1ダムとナム・ソン・ダム及びナム・トゥン第2ダムについて、住民移転問題、経済性への疑問、水没地の伐採問題、電力問題などを検証し、世界銀行、アジア開発銀行の動きを紹介し、メコン川開発の今後について追及する。

リスベス・スライター著『母なるメコン、その豊かさを蝕む開発』（めこん・1999年）は、メコン開発に対し、その流域に住む人々の犠牲でなっている、これからの開発は農民や漁民たちと一緒に図られるべきだと問う。

自然と共生するメコン

メコン流域全体には6576万人が住み、さまざまな民族が分布する。生態学者たちがメコン流域を巡った、森下郁子他著『メコンとメナム・チャオブラヤに行く』（遊タイム出版・2016年）には食文化などを表す。山岳地帯はジャポニカ米、低地ではインディカ米を育てる。それぞれの土地にあったトウガラシが食文化の中心となる。魚食文化については、山岳民族はほとんど魚を食べない。ベトナム、カンボジアなどでは魚を並べたり、魚を干すときは腹を上にして背を見せる。

秋道智彌編『図録 メコンの世界―歴史と生態』（弘文堂・2007年）は、総合地球環境学研究所のプロジェクト研究「アジア熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究・1945―2005」をまとめたものである。森林、大地、水域、野生動物と家畜、モノづくりの智慧、食文化、食と栄養・健康、商品と国際交易、モンスーン地域の資源管理からなる。

おわりに、春山成子著『自然と共生するメコンデルタ』（古今書院・2009年）を掲げる。本書は、地理学者の立場から、メコンデルタは変動地帯、多雨地帯であることから自然災害と隣り合わせである。台風災害、豪雨災害、旱魃、山崩れ、斜面崩壊、火山噴火における災害に対し、人々がどのように向き合っていくかに焦点をあてて、論考されている。

以上、メコン川について紹介してきたが、あまりにもメコン川の世界は巨像であって、わずかに鼻の一部に触っただけに過ぎない。

〈大地春や蛇行のメコン雲に果つ〉（千葉 香）

まちの文化発信力を 維持する人々

—岡山県倉敷市

魅力づくりの
教え 11



美観地区を象徴する
倉敷川と観光川舟

人口減少期の地域政策を研究する中庭光彦さんが「地域の魅力」を支える資源やしくみを解き明かします。今回は倉敷の「美観地区」です。



中庭 光彦
なかにわ みつひこ

多摩大学経営情報学部
事業構想学科教授

1962年東京都生まれ。中央大学大学院総合政策研究科博士課程退学。専門は地域政策・観光まちづくり。郊外・地方の開発政策史研究を続ける一方、1998年からミヅカン水の文化センターの活動に携わり、2014年からアドバイザー。「コミュニティ3.0——地域バージョンアップの論理」(水曜社 2017)など著書多数。

倉敷美観地区の 核は倉敷川

京都、大阪、金沢、柳川、など日本には水都と呼べる美しい都市が点在している。そこにはほぼ例外なく水の流れがあり、空間を美しく保全しようという地元の人々の思いがある。

今回訪れた「倉敷美観地区」もその一つだ。観光雑誌には岡山県随一の人気観光地として紹介されている。日本初の西洋美術館である大原美術館や蔵が倉敷川を取り囲む水辺景観は大変に美しい。年間およそ380万人もの観光客が訪れている。

景観保全の面からもモデル都市として有名で、他の都市にまねさせるだけの影響力をもっている。たしかに、美しいまちなみは多数見てきたが、倉敷のまちなみは別格というべき美しさだ。特に屋根が折り重なる眺望はすばらしい。

この倉敷美観地区の基軸となっているのが、倉敷川だ。この水辺空間がなければ美観地区の価値は半減してしまう。

このまちを、人々は意図的に守ってきた。倉敷紡績株式会社創業者である大原家の役割のみならず、林源十郎、原澄治といった地元有力者の協力が大きい。

現美観地区はどのようにして形成されたのか、そして現代ではどのような人々がまちを守っているのだろうか。そのような疑問をもち、今回倉敷を訪れてわかったこと。それは、現在の美観地区すな

わち倉敷川畔が、海に向かって干拓・埋立を繰り返してきた歴史と文化の境界地にあるという事実だった。

旦那衆がつくった 倉敷川畔の景観

倉敷の江戸時代古地図を眺めると現美観地区は海岸だった。その後沖合に向かって干拓・埋立されたのだ。

倉敷川は美観地区から東に向かい、児島湾干拓地として知られる児島湖に注ぐ。倉敷川は舟運路であると同時に、干拓地が造成され



倉敷川を通じて瀬戸内海とつながっていた倉敷。かつて島だった児島(備前児嶋)との間にある「藤戸海峡」は重要な航路だった。提供:岡山県立図書館・電子図書館システム「デジタル岡山大百科」※1706年(宝永3)から1829年(文政12)までに作成された図と考えられている

るなかでの排水路だった。

その干拓・埋立は商人たちの力で行なわれた。江戸時代前半の水主(注)を出自とする商人、さらに江戸時代後半の新興商人は財力で土地を取得し大地主となっていた。土地持ちの旦那衆が富を蓄積しつくった景観。それが倉敷川畔に集まっている蔵であり、現美観地区の屋敷・商家群、そして1930年(昭和5)に建てられた大原美術館なのである。

美観地区を見下ろすことができ、鶴形山の山上に鎮座する阿智神社には、江戸時代の川灯籠のレプリカが残されている。倉敷川舟運を思い出させる灯台だ。このあたりが海岸線だったころを想像することができる。

高梁川を一本化した 倉敷の治水と用水

現美観地区がかつては干拓・埋立の境界地であったと聞けば、ここいどのようにして用水が届けられていたのかが気になる。

現在、倉敷の西側には、高梁川が流れている。高梁川は明治時代前半まで酒津から二つの流れ(西高梁川、東高梁川)に分かれていた。

1892年(明治25)から1894年(明治27)に起きた大洪水を機

に、その二つの流れを西高梁川に一本化し、東高梁川を廃川とした歴史がある。同時に酒津に笠井堰も竣工し、両高梁川に12カ所あった農業用水取水口が酒津1カ所にまとめられた。工事終了は1925年(大正14)。

1928年(昭和3)の地図を見ると、この酒津から延びる用水路が、美観地区に水を届け、一部は倉敷川に流れ込んでいることがわかる。倉敷用水である。

現在、高梁川の酒津は桜のきれいな配水池の公園となっており、そこから東西用水が流れ出している。配水樋門には五つの口があるが、下流から見ると左から西岸用水、西部用水、南部用水、備前樋用水、そして倉敷用水となる。また配水池北側からは八ヶ郷用水が流れ出す。

用水では子どもが遊び、揚水車が据えられている風景が現在も見られる。

倉敷美観地区は、高梁川流域の用水路の先端につくられたことによる。

文化都市を夢見た 大原家の遺伝子

美観地区を守ったリーディング企業は倉敷紡績だ。特に二代目社

(注)水主

江戸時代の船舶の一般乗組員のこと。水夫とも書く。



1 笠井堰で取水された高梁川の水は、酒津配水池から倉敷市や周辺の農地などに配られる 2 配水池北側から流れる八ヶ郷用水沿いには揚水車が点在する 3 八ヶ郷用水に面して建つ水辺のカフェ「三宅商店 酒津」。倉敷を案内してくれた辻信行さんが手がけたもの



「黄薇中州地理図(P39)」と見比べると、現在の倉敷美観地区から南に向かって干拓・埋立を繰り返したことがわかる

息子の大原總一郎は、倉敷をドイツの城郭都市ロートンブルグのようにしたいと、美しい文化景観にこだわった。ローテンブルグの広さは約1kmの正方形。その程度の広さで歩いて暮らせるまちを總一郎は考えていた。真の職住近接ともいえる。

大原の下で倉敷アイビースクエアなど多くの設計を手がけた建築

なぜここに紡績工場をつくったのか。その背景には、原料となる綿花が塩分に強く、干拓地で好まれた樹種だったことがある。この工場都市に文化都市の夢を与えたのが大原孫三郎で、日本最初の本格的な西洋美術館である大原美術館を建てたのも彼だった。

その辻さんも倉敷の水文化の価値を認識されているのだろう。酒津配水池の北側に水辺のカフェを運営している。

大原孫三郎はイギリスの先進的工場経営者だったロバート・オーウェン(1771-1858)の影響を受け、工員が住む寄宿舎、病院、学校が一体となった工場をここに整備した。

では、現在の美観を守る人々はこのような方なのか。今回まちなかを案内してくれたのは三宅商店店主の辻信行さん。本通り商店街の林源十郎商店をセレクトショップとして運営し、もとは小学校の先生だが、マスキングテープをプロモーションし若い女性の人気商品としたのは、なかなかの手腕だ。

長大原孫三郎(1880-1943)、孫三郎の長男で倉敷絹織(クラレ)二代目社長と倉敷紡績四代目社長を兼任した大原總一郎(1909-1968)の役割は大きい。倉敷紡績創業は1888年(明治21)、翌年には倉敷アイビースクエアのある場所に本社工場を建てた。

家の浦辺鎮太郎(1909-1991)、地元の有力者、自治体が協力した結果、いち早く倉敷市伝統美観保存条例(1968年)が制定され、まちなみ景観が維持されてきた。

代替わりして 今を支える人々

水で潤う倉敷美観地区は、このような人々により形成され、「美観を守る」という文化を根づかせた。

至 JR倉敷駅



「倉敷路地市庭」実行委員長の原浩之さん



林源十郎商店などいくつものプロジェクトを動かす辻信行さん



倉敷路地市庭

林源十郎商店

語らい座
大原本邸

有隣荘

大原美術館

倉敷民藝館

倉敷中央通り

大原美術館分館

倉敷考古館

倉敷川

鶴形山公園

阿智神社

本町

本町通り

倉敷紡績(株)

倉紡記念館

代官所内壕遺構

倉敷アイビスクエア



今、日本に限らず世界中の国や都市は、魅力づくりで競争している。まさにソフトパワーと呼べる文化発信力で競っているわけだ。ヴェネツィア、アムステルダム、ニューヨーク、シンガポールなど各都市が独自の魅力を発信している。それはたんに目に見える景観だけでなく、そこで活躍する人々の創造性の蓄積——まさに文化ま

倉敷が蓄えてきたソフトパワー

がわかったただけで十分だ。

いる。倉敷は路地の多さで有名だが、ある路地に入ると古い商家の庭で「倉敷路地市庭」という地元産品を扱った仮設マーケットが開かれていた。覗いてみると寿司、乾物、エスニック料理、フルーツ、スイーツ、有機栽培の野菜、カフェと色々な店が並び、週1回開かれている。実行委員長は原浩之さん。名刺を見ると「倉敷天文台理事長」とある。日本初の民間天文台をつくった原澄治の縁者の方とお見受けしたが、立ち入った話はしなかった。

でもがメッセージとして伝わる都市である。

倉敷も「美観」というソフトパワーを蓄えてきた都市といえる。江戸時代からどんどん干拓・埋立を進めた地元商人、明治期から文化的な工場都市づくりを目指した大原孫三郎、さらにこのエリアの「美観」を守ってきた大原總一郎や地元の人々、そして現在はその美観に自らの創造性を加えてみたいという人々が集まってきている。

この人々を私は「美観を守ってきた」と表現したが、実は美観を「創造しつづけてきた」と言った方が正確だろう。

用水の末端にできた陸と干拓・埋立の境界の土地で文化を蓄積してきたおかげで、倉敷美観地区は若い世代による新たな活動の舞台を提供しつづけている。

（魅力づくりの教え）
土地の文化を守りつづけることは、新たな世代の活躍の舞台づくりにつながる。都市のソフトパワーを生む大きな要因である。

（2018年3月30～31日取材）

参考文献

- 犬飼亀三郎「大原孫三郎父子と原澄治」（倉敷新聞社 1973）
- 大原孫三郎傳刊行会「大原孫三郎傳」（1983）
- 室山貴義・金井利之「倉敷の町並み保存と助役・室山貴義」（公人社 2008）
- 吉原睦「倉敷美観地区」（日本文教出版 2011）

漁民から全国へ広まった 佃煮

水と風土が織りなす食文化の今を訪ねる「食の風土記」。今回は東京都中央区佃発祥の「佃煮」です。酒のつまみやご飯のお供に欠かせない佃煮は、もとは売り物にならない小魚を塩で煮詰めた保存食でした。佃島の漁民たちによって生まれた佃煮は、どのように各地へ広がっていったのでしょうか。



佃島漁民と 徳川家康の縁

江戸時代は漁師町で、近海漁業や魚商売に携わる人々が多く住んだとされる隅田川河口の佃地区（旧佃島）。当時の名残をとどめる掘割の船溜まりや家々の間を細く延びる路地、ひらけた軒先に揺れる洗濯物など、古きよきまちなみの風情は今も健在だ。

佃煮発祥の地として知られる佃地区には、現在3軒の老舗の佃煮屋が残る。『日本民俗大辞典』によれば、佃煮は「魚介などを醤油、砂糖、さらには水飴などで調味煮熟した保存性のある食品の総称」とある。佃煮は、どのようにして生まれたのか。佃島の歴史や佃煮が広まった背景を聞くため、中央区立郷土天文館へ足を運んだ。

1590年（天正18）、徳川家康の江戸入府にあたり、摂津国西成郡佃村（大阪市）より漁師33人がこの地へ移住してきたことが佃島の始まりとされる。

摂津国に居住し漁業を行っていた佃村漁民は、家康が住吉神社（大阪市）に参拝する際、増水していた神崎川（当時は三國川〔淀川水系〕）の渡船御用を勤めたことを機に、のちに江戸城の御菜魚上納を命じ



佃煮の製造工程(昆布の場合)



1
ゆでた昆布を
水にさらし、泥など
落としたあと、
まな板の上で切る



2
細かく切ったら
また水で洗う



3
刻んだ昆布を
鍋に入れて
タレで煮込む



4
泡の色と
昆布の色で
煮えたかどうか
判断する



5
鍋からすくって
ザルへ移す。
ザルの下の容器で
タレを受ける



6
しょうゆと三温糖
を継ぎ足して
少し煮て、また
新たな昆布を
投入する

でも重宝された。こうして徐々に各地に広まっていったのである。

伝統の味を守る 甘辛い秘伝のタレ

佃地区に3軒残る佃煮屋のうちの1軒、「佃源 田中屋」を訪ねた。入口を入ると目の前のショーケースに特選こんぶ、あさり、しらすなど、さまざまな種類の佃煮が並ぶ。店先まで甘く香ばしい香りが漂っていたのは、七代目店主の海老原力(つとむ)さんが、原料の日高昆布を大きな釜で煮詰めているところだったからだ。海老原さんは佃の生まれで、高校卒業後すぐに佃煮づく

りの道に入り37年目になる。「先代は子どもがいなかったのか、かわいがってもらっていた私がこの店を継ぐことになったのです。佃煮づくりの工程はすべて見て覚えまして」

七代目であることは確かだが、創業がいつなのかはつきりわからないと海老原さんは笑う。佃煮は、子どものころからお新香代わりに毎日食べているそうだ。

佃煮づくりは、すべて手作業だ。日高昆布の場合、硬さもあるため芯が残らないよう3時間、ものによつては6時間ゆがく。柔らかくなった昆布は落とし蓋をして一晚

蒸らし、流水でしっかり洗ったものを細かく刻む。これをしょうゆに三温糖を加えた甘辛いタレで、約1時間半煮込むのだ。

タレは昔ながらの秘伝のタレで、煮終わって漉したものに、翌日またしょうゆと三温糖を継ぎ足しながら使いつづけている。「タレにも種類があり、ものによつて甘さも変えています。各店で使っているしょうゆや砂糖も違うので、それぞれの店が独自の味をもっているのです」と海老原さん。

田中屋の佃煮は百貨店に少し卸しているだけで、ほとんどが店頭での直売だ。「みんなが店まで買い

に来てくれるのです」と海老原さんは言う。5〜6軒あったと伝わる佃煮屋も、海老原さんが生まれたころにはすでに3軒だけだった。

増山さんは「戦後復興の過程で食生活が変わり外食なども普及するなか、佃煮の需要も少なくなりましたが、独特な風味と素材のままが凝縮された佃煮は、伝統的な食文化の一つとしてこれからも残っていくと思います」と語る。

渡船、川、漁師。始まりは偶然といえは偶然かもしれないが、佃煮は日本の「水文化」が結びつけた賜物なのかもしれない。

(2018年4月27日取材)

取材協力: 佃源 田中屋
東京都中央区佃1-3-6 Tel.03-3531-2649
(平日9:30~17:30 / 日・祝10:00~17:00)



坂本ケンと行く川巡り 第15回 Go! Go! 109水系



坂本 貴啓

さかもと たかあき

国立研究開発法人
土木研究所
水環境研究グループ
自然共生研究センター
専門研究員

1987年福岡県生まれの川系男子。北九州で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味をもちはじめ、川に青春を捧げる。全国の河川市民団体に関する研究や川を活かしたまちづくりの調査研究活動を行なっている。筑波大学大学院システム情報工学研究科修了。白川直樹研究室「川と人」ゼミ出身。博士(工学)。2017年4月から現職。

「シラス文化圏」の肝属川

あいら
始良火山の大噴火が築いた

川系男子 坂本貴啓さんの案内で、編集部の面々が全国の一級河川「109水系」を巡り、川と人のかかわりを探りながら、川の個性を再発見していく連載です。

109水系

1964年(昭和39)に制定された新河川法では、分水界や大河川の本流と支流で行政管轄を分けるのではなく、中小河川までまとめて治水と利水を統合した水系として一貫管理する方針が打ち出された。その内、「国土保全上又は国民経済上特に重要な水系で政令で指定したもの」(河川法第4条第1項)を一級水系と定め、全国で109の水系が指定されている。

日本最南端の 一級水系「肝属川」

鹿児島県の大隅半島に、日本最南端の一級水系、肝属川(きもつぎがわ)があります。この流域は桜島・錦江湾一帯の始良(あいら)カルデラ大爆発の火山噴出物によって形成された火山灰のシラスで形成されています。土地がシラスだったからこそその苦勞(くろう)があり、生まれた産業があり、川の風景があります。「シラス文化圏」ともいえる肝属川水系を巡りました。

笠野原台地と 困難な水資源開発

肝属川流域は水が取りにくくて苦勞(くろう)し、水が多くて苦勞(くろう)し、そして水の質が悪くても苦勞(くろう)してきた流域です。水の確保に苦勞(くろう)したのは、肝属川がシラス台地を回り込むように低いところを流れているため、川の水を直接利用できないこと、そして流域の大半がシラス台地であることに関係しています。シラス台地は保水力がなく、地下深くに水が浸透してしまうのです。

この苦勞(くろう)の歴史は江戸時代にさかのぼることができます。当時、薩摩藩の領内は薩摩半島ばかりが発展していたので、領地の半分を

肝属川の支流・串良川とシラス台地を望む。2万5000年前、始良カルデラから噴出した堆積物がつくったシラス台地で先人たちは苦勞(くろう)した



占める大隅半島に目をつけたのでしよう。ですから、薩摩藩にとつて、広大な平地である笠野原台地の開発は非常に重要でした。しかし、台地の上は水に乏しいため、先人たちはとても苦労しました。

この地の住民として笠野原台地の開拓史をずっと見てきた笠野原開発資料館の安藤一夫さんにお話を伺いました。

「当時は、遠くまで水を汲みにいかなければならず、家事をするだけでも一苦労でした。台地の上ですの井戸は深く掘らなければ水が出ません。そのため、人力では汲めず牛に綱を引かせて汲み上げていました。そんな土地なので干ばつが多く、10日以上雨が降らなると畑は干からび、作物は育ちませんでした。カライモ（サツマイモ）で生きつないだ時代もあります」

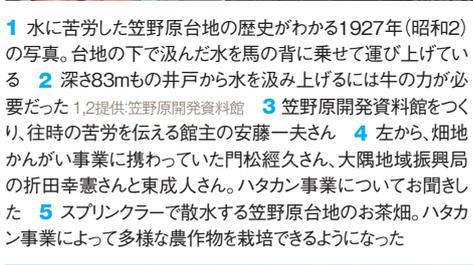
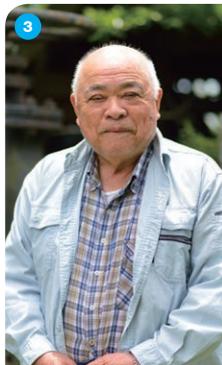
それが変わりはじめたのは昭和30年代です。国を挙げた日本で初めて畑地かんがい事業（農林省国営笠野原畑地かんがい事業Ⅱ通称ハタカン）が笠野原台地で始まったのです。

国は笠野原台地に水を安定して供給するために、肝属川の支流である串良川の上流に利水専用の高限ダムを建設して水源を確保しました。1967年（昭和42）のことで、台地に幹線パイプラインを引き、高限ダムから水と呼び込みま

した。そして、笠野原台地の隅々まで水を巡らせる役割は鹿児島県と笠野原土地改良区が担いました。当時、畑地かんがい事業に携わっていた元鹿児島県職員の間松經久さん、その地域を所管する鹿児島県大隅地域振興局農村整備課の折田幸憲さん、原田洋一郎さん、東成人さんにお会いしました。

「シラス台地はため池をつくることもできない地質だったので、こで行なう当時の農業は『限界地農業』と言われていました。天水しか得られないので、カライモ、なたね、そばなど水が少なくても育つ農作物が主でした。その台地にパイプラインの幹線がきたことで、県などは地中にパイプラインを毛細血管のように張り巡らせる事業を行ないました」（門松さん）

これらの事業を経て、キャベツ、大根、さといも、茶など水が必要な作物もつくれるようになりました。畜産も盛んです。ハタカンで引いたパイプラインは地面の下に埋まっていますので、一見するとこの地に水がきているように思えないですが、人が築き上げた水インフラの水脈が台地を満たしています。こうした人々の努力で、肝属川流域の笠野原台地は今では鹿児島県を代表する畑作農業地帯になりました。



6 大隅河川国道事務所の山村昭一郎さん(右)と吉武真吾さん(左)。鹿屋分水路から支流の始良川まで現地を案内していただいた 7 右側が肝属川の本流で、左側が鹿屋分水路の始点 8 1976年(昭和51)の水害を機に、地下にトンネルを掘って設けられた鹿屋分水路。地域住民の暮らしを守る「パイパス」だ 9 鹿屋市市民交流センター「リナシティかのや」の前を流れる肝属川。中心市街地にこうした親水性の高い広場があるのは珍しい





水が多すぎても苦勞する

シラス台地に覆われた肝属川は、水の確保に苦勞してきた半面、雨の多さにも苦勞してきた川です。川としてどんな特徴をもっているのか、肝属川を管理する大隅河川国道事務所の山村昭一郎さんと吉武真吾さんにお話を聞きました。

「肝属川は年間約2800mm（日本の平均雨量1700mm）もの雨が降る流域です。そのため、よく川が増水します。九州地方は東半分が台風性の雨、西半分が梅雨性の雨に起因する洪水が多く、東側に位置する肝属川は台風性の雨による洪水が多い川です」

さらにシラスに覆われた地は、洪水から暮らしを守ってくれる堤防を築くのに苦勞があります。「シラスは粒子が小さく、川の流れに対して弱いのです。そのため川に堤防を築くとき、土砂にシラスが含まれていると堤防が弱くなってしまうので、しっかりと被覆して水に当てないようにしています」シラスに覆われている土地ならではの苦勞です。

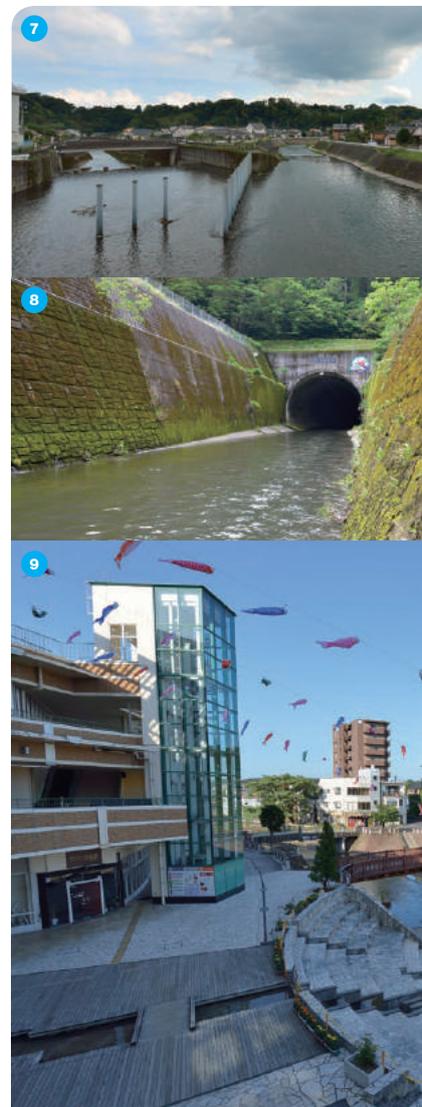
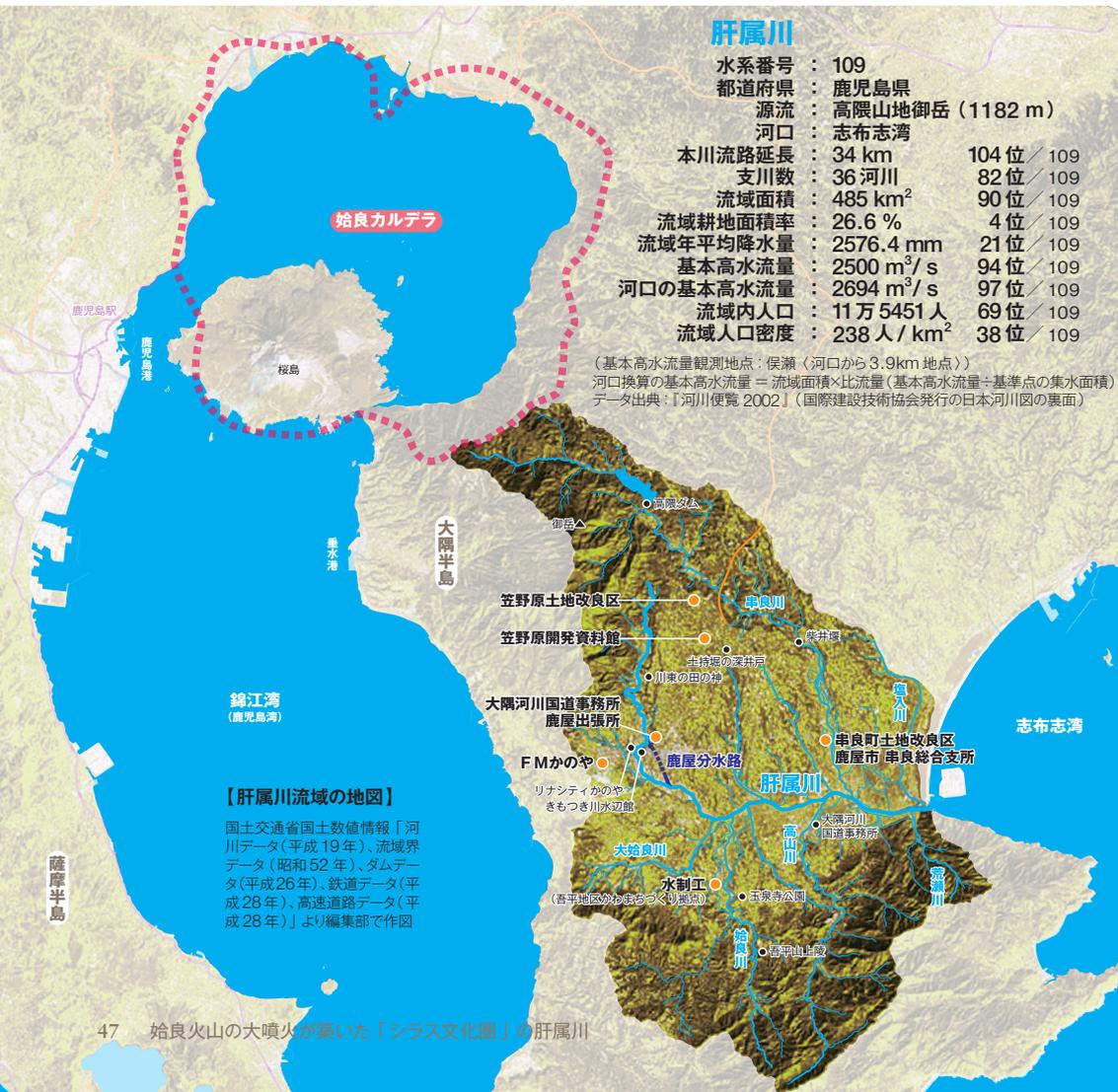
洪水からまちを守るために行なわれた大きな治水事業として、鹿屋分水路の建設があります。「肝属川は多くの人が生活してい

る鹿屋市街の中心部を流れていきます。そのため、市街地に水をあふれさせないように上流で水を分けるため、台地の下にトンネルを掘って、分水路という新たな川をつくりました。こちらにも水を流せるようにすることで、洪水時には鹿屋市街を流れる肝属川本川の水位を下げて危険を軽減できます」

この日鹿屋分水路のトンネル内を見学させてもらえる予定でしたが、前の日に少し雨が降り、水位が高くなってしまったため、上から見るのみでしたが、確実に治水効果を発揮していました。

九州ワーストの水質と向き合う

肝属川は九州に20ある一級水系でワーストの水質といわれています。九州の他の川と比べると、シラス台地で盛んな畜産からの汚れの割合が少し大きいようです。また家庭排水による汚れも目立ちます。行政による浄化施設の整備などで徐々に改善されてきてはいますが、根本のところでは、「川をよくしたい」という市民の気運が高まる必要があるかもしれません。ラジオ放送というツールを用いて、肝属川環境改善の気運を高めようと奮闘している、NPO法人





10 昔のようなきれいな肝属川を取り戻そうとFMかのやが呼びかけて「カワ」に「イイ」ことを実践する「カワイイproject」の参加者 11 肝属川の清掃イベント「藻(も)っとる作戦!」で取り除かれた外来種の藻 10,11提供:NPO法人かのやコミュニティ放送 12 FMかのやの放送ブース。ここから肝属川に関する情報を発信 13 NPO法人かのやコミュニティ放送の中村なおみさん

かのやコミュニティ放送の中村なおみさんにお話を聞きました。「ラジオ局がなぜ川の活動をしているの?と思う方がほとんどだと思います。きっかけはラジオ番組で肝属川でのカヌー体験をしたことでした。川に足を入れたときに感じたぬめりと悪臭、川のなかに何があるのか見えないなど強烈な印象でした。その後、肝属川の環境をよくしたいと考えるようになりました。ワーストから抜け出すために川によいことをしようと

「カワイイproject」を始めました。多くの方々の協力や声があつて現在に至ります」

地域の暮らしに大切な肝属川の環境への取り組みに、多くの方々に関心をもってもらえるよう、言葉や活動名にも工夫を凝らし、川の流れを悪くしていた外来水草オオカナダモの除去活動は「藻(も)っとる作戦!」と名づけ、「川に入る勇氣のある勇者募集!」というキャッチーな言葉で呼びかけたそうです。

これまでの活動により、一昨年(2016年)は肝属川中流で13年ぶりにアユの生息が確認されたといううれしい報告も受けたとのこと。きれいな川を取り戻すための課題はあるものの、ラジオ局が川の活動を始めてから5年目、学生たちとともに活動した肝属川の透明度は増し、少しずつ自然本来の姿に近づこうとしています。

川の恩恵に感謝し 40年間活動続ける

人の意識を変えるにはFMかのやのように新しく始めることも重要ですし、長く続けることも重要です。肝属川の支流の始良川と40年近く向き合ってきた始良川河川愛護会の皆さんにお話を聞きました。

「始良川上流域は神武天皇の父母の墓陵として祀られる吾平山上陵があり、神の川として清らかな流れを湛えてきました。始良川が流れる吾平町は海なし町で、水と戯れられるのは始良川だけです。町民は始良川を楽しんできました。

楽しみの一つはアユを釣ることでした。始良川では昔から30cmを超える大きさのアユが釣れるんです。ところが昭和40年代からアユが獲れなくなってきた、アユが上る魚道や川の構造物など川の環境に目がいくようになりました」

当初はアユを食べ、川の恩恵に感謝できるようにと発足した始良川アユ同好会は、1977年(昭和52)に始良川河川愛護会として活動をはじめました。

「当時、始良川はアユ釣りを楽しむ場所ではありましたが、川に物を捨てる人も多くいました。川に物を捨てないようにしようと思ったのが水質汚濁対策で、毎年6月には始良川一斉清掃を行なっています。そのほかにも小学生の始良川の絵画・作文コンクールを実施しています」

こういう地道な長い活動の効果で町民の意識も上がってきたといえます。これからもアユ釣りを存分に楽しめる始良川であってほしいです。また河川管理者が行なう



14 40年にわたり活動を続けてきた始良川河川愛護会の皆さん。右から代表の小林昭二さん、事務局長の二間瀬真由美さん、本村和明さん、河野正文さん 15 始良川河川愛護会のアイデアも取り入れてつくられた石組みの水制工 16 始良川上流のほりにある吾平山上陵 17 吾平山上陵付近の始良川は神の川の名にふさわしい清らかな流れ





18 川原園井堰まで案内して下さった串良町土地改良区の町田浩さん(中央)と鹿屋市産業建設課の新留淳一さん(右)

19 「柴井堰」の設置場所。この日は増水していたのであまりよく見えないが、こうした水の流れが運ぶ泥や砂を受けて堰は強度を増す



19

現存する唯一の柴でつくる堰

限られた水をうまく使おうと地

河川事業に対しても長年の経験を活かして意見を述べた一幕が最近あったそうです。河川敷の竹林の区域を洪水対策のために除去することになった河川管理者に対し、「ここは魚が多く棲む場所だから治水も重要だけど生きものにも配慮してほしい」と意見を述べたそうです。河川管理者と一緒に知恵を絞って新たに生まれたのが水際に張り出した水制工の石で、これがこれから川のなかの流れに変化を生んでいくことが期待されています。こういう意見交換ができるのは長年の経験のある団体だからこそ、すばらしいことだと思います。

域独自の水技術を確立してきた川として、肝属川の downstream で合流する支流・串良川があります。この地域には、川原園井堰という名の堰があります。この堰は地域独自の柴(注)でつくった「柴井堰」という構造になっています。川に横木を渡し、そこに、柴を重ねてまた取り外す、一年性の伝統技術を駆使した堰です。300haの農地に水を供給している重要な堰です。柴井堰を管理している串良町土地改良区の新町浩さん、鹿屋市産業建設課の新留淳一さんにお話を聞きました。

「柴井堰は川幅43mを堰上げてつくります。素材の木には山から切り出したマテバシイを使います。3月の2週目くらいに山に入り、木を伐り出し、長さ150cm、胴回り50cmの束を150束ほどつくって、それを川に掛けて、できあがりです。時間とともに枝の隙間が詰まっていき、しつかり堰上げされるようになります」と新町さん。

きわめてシンプルな堰のつくりですが、この束ね方には高い技術力が必要であり、限られた人しかうま

くつくることができないう伝統技術であるため、市の無形文化財として技術そのものが登録されています。昔は各地にあった柴井堰でしたが、今は日本でもここだけになってしまいました。農家は水が安定して供給されればいいので、複数あった堰はほとんど統合が進んでいます。しかし串良川には地域固有の文化的景観を誇りに思う人たちがいたからこそ、今日までこの堰は残ってきたのでしょう。

使える水が少ないシラス文化圏

始良大噴火の影響を色濃く受け、「シラス文化圏」として発展してきた肝属川流域を見てきました。ひと言で言い換えると「使える水が少ない流域」といえるかもしれません。台風性の大雨が降り、川の洪水をさばくのに毎回戦い、そして地表に降った雨は地下深くに浸透するので溜めることができません。2週間も雨が降らないと渇水と戦う。おまけに、近年は水質改善に向けて奮闘してきました。

そんな苦勞のなかで肝属川流域の人たちが水土の知恵で暮らしを豊かにしてきたことをうかがい知ることができました。

(2018年5月8、10日取材)

(注) 柴 山野に生えているあまり大きくない雑木やその枝のこと。

肝属川の扇頂(扇状地の始点)にある田の神像。安永年間(1772-1781)に奉納されたと記されている。稲作の豊凶を見守る農神として信仰されている田の神像は、鹿児島県と宮崎県の一部にしか見られない。鹿屋市内ではおよそ140体が確認されている



肝属川の河口を歩く坂本さん



川名の由来【肝属川】

肝属郡の名から。現在の肝属郡は大隅半島の3分の2を占めるが、古代の肝属郡は大隅半島の南部に限られていた。



2018年の「発見!水の文化」がスタートしました!

Webで公開中!

ミヅカン水の文化センターが2017年度からスタートした「発見!水の文化」。身近で気軽に参加できるような企画テーマを用意しています。2018年度の「発見!水の文化」にもぜひご期待ください!
<http://www.mizu.gr.jp/hakken/houkoku/>

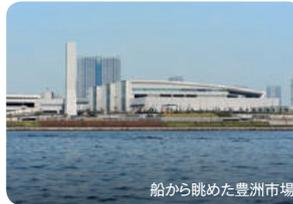
第6回

船でめぐる東京の水辺 ～かわりゆく臨海部編～

—2018年4月28日(土) 9:00～12:30

講師: 阿部 彰 (あべ あきら) さん 一般社団法人 まちふね みらい 塾 専務理事
 高松 巖 (たかまつ いわお) さん 一般社団法人 まちふね みらい 塾 代表理事

参加者数
38名



船から眺めた豊洲市場



有明アリーナの工事現場

2018年度最初の「発見!水の文化」は、2017年に残念ながら台風で中止になってしまった企画をついに実現! 好天に恵まれたゴールデンウィークの初日。開発が進んでいる東京の臨海部の歴史・文化的背景について学びながら、これからどのように変わっていくかとしていくのかを水面側から発見しました。



開催した 「発見!水の文化」

第7回

江戸の水辺街歩き (日本橋編)

—2018年6月9日(土) 開催

ルート: 日本橋・日本橋室町エリア → 日本橋堀留町・小網町エリア → 日本橋兜町・茅場町・新川エリア → 隅田川河口解散

第8回

船でめぐる東京の水辺 ～江東の内部河川編～

—2018年6月23日(土) 開催

※2018年10月13日(土)も開催決定

ルート: 豊洲～荒川ロックゲート → 旧中川・横十間川・小名木川エリア



荒川と旧中川を「船のエレベーター」としてつなぐ荒川ロックゲート

2018年9月以降の予定は決まり次第、HPでご紹介いたします。皆さまの参加を心よりお待ちしております!

Web「水の風土記」最新記事のご紹介

魅力あふれる独自の「水の文化」を培っている「人」や「事・場」を訪ねて、その研究や活動を「水の風土記」としてホームページでご紹介しています。ぜひご覧ください! <http://www.mizu.gr.jp/fudoki/>

Webで公開中!

人ネットワーク

アクアツーリズムから探る「水と人」の付き合い方

野田 岳仁 (のだ たけひと) さん
立命館大学 政策科学部 助教



琵琶湖の北西部に位置する滋賀県高島市の「針江(はりえ)集落」に足しげく通い、ここを基準点にしながら各地を訪ね歩く野田岳仁さんに、アクアツーリズムの可能性についてお聞きしました。

事・場ネットワーク

「結の心」で取り戻した「水の知見」を海外へ!

福井県大野市

40年前に深刻な「井戸枯れ」の危機に直面した福井県大野市は、市民が一体となった保全活動で再び地下水を取り戻した歴史があります。さらに、数年前からもう一步踏み込んだ地方創生への試みを進めているとお聞きして現地に向かいました。

湧き水を飲む男の子



水の文化 Information

■「水の文化」に関する情報をお寄せください

本誌「水の文化」では、今後も引き続き「人と水のかかわり」に焦点をあてた活動や調査・研究などを紹介していきます。

ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根ざした調査や研究がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

■ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください。

<http://www.mizu.gr.jp/>

■水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページからPDFファイルとしてダウンロードできるほか、冊子をご希望の方はホームページの「最新号のお申し込みボタン」からお申し込みいただけます。どうぞご利用ください。

■「水にかかわる生活意識調査」ホームページで公開中

20年以上にわたり、ほぼ同じ内容で日常生活と水とのかかわりや意識、水と文化に関する生活意識調査を実施しています。結果はすべて公開していますので、ぜひご利用ください。

皆さまの感想を お待ちしております！

『水の文化』59号について、アンケートにご協力ください。
今後の機関誌をよりよくしていくための参考にさせていただきます。

◆アンケートへの回答はこちらから。

<http://www.mizu.gr.jp/form59.html>



※アンケート用紙をお持ちの方は、FAXまたはメールにて
下記へご返信いただく形でも結構です。

FAX：03-3568-4025

メールアドレス：mizubun@mizu.gr.jp

編集後記

少年期に友達と近くの池や川で楽しんだ釣り。その際に釣った魚の魚拓を取り、その後、家族で美味しく食したことを久しぶりに思い出した。今回のテーマを通じて「釣り」は、単に魚を釣るだけではなく、そこにある人間の気持ちや文化があることを再度認識することができた。(浅)

自分は釣りをしないが、息子にはして欲しいと思っている。この取材を通じて釣りの多面的な魅力に触れ、思いは強まった。釣り方の工夫や命への対峙の仕方、環境への配慮法など、正解のない無数の問いに自問自答する過程から得るものは計り知れない。釣堀から連れ出した。(松)

初めて本格的に釣りを体験する機会を与えられ、なんとか二匹が釣れた。釣った瞬間に感じた喜びは、確かに普通のスポーツと比べられない感覚で、釣りに没頭する人たちの精神は実感できたと思った。それと同時に、釣られた相手が可愛そうと思わずにはいられなかった。(FG)

釣りに対して残酷なイメージを持っていたが、取材を通じて釣りと水、環境への深いつながりを感じた。また初めて釣りを体験し、釣りを楽しむ人の気持ちを感じることができた。関わり方によっては、釣りも素敵な趣味になるのではないかと思った。(青)

夏休み、家族旅行の定番が海水浴と釣りだった。黙々と釣り糸を垂らして、どんな魚が釣れるのかワクワクした。釣りをしている間、会話は無かったけれど、一体感というか、団結感があったと思う。外食先、全員がスマホを見ている家族に是非オススメしたいものだと思ったのでした。(飯)

釣りは小学生の時以来で、釣堀である程度釣れた記憶がある。今回、本格的な釣りの機会があったが、いずれも釣れず……。取材を進めていくと、いろいろな仕掛けや工夫、心構えがあることがわかり、自分の姿勢の甘さを痛感した。大岡玲さんの言葉をお借りすれば、次回こそ地球と交信してみたい。(力)

少年期は釣りに夢中だった私。今回の取材で久々に琵琶湖のバスをルアーで狙い、生まれて初めてテンカラと和竿を体験すると、釣り熱が一気にふり返りました。しかも若い頃とは違って、ただ水辺で竿を振っているだけで大満足。「歳を重ねるのも悪くないなあ」と思いました。(前)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化 第59号

ホームページアドレス

<http://www.mizu.gr.jp/>

発行

ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川 1-22-15 茅場町中塾ビル 4F

株式会社 Mizkan Partners

Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

発行日

2018年(平成30)6月

企画協力 (氏名50音順)

沖 大幹 東京大学生産技術研究所教授
古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会
陣内秀信 法政大学名誉教授
鳥越皓之 大手前大学学長
中庭光彦 多摩大学教授

制作

浅野修弘
松本裕佳
Fleminger George
青木広実
小林夕夏
久保悦史
飯野真奈実

編集製作

前川太一郎 編集
中野公力 デザイン・撮影
蔵田 豊 デザイン

執筆

秋山健一郎 (pp.31-34)
佐々木 聖 (pp.6-9, pp.28-30)
開 洋美 (pp.10-13, pp.24-27, pp.42-44)
前川太一郎 (pp.14-23)

撮影

大平正美 (p.24, p.28, pp.42-44)
葛西亜理沙 (pp.4-5, pp.10-13)
川本聖哉 (pp.2-3, pp.14-19, pp.22-23)
鈴木拓也 (p.6)
中野公力 (pp.45-49)
藤牧徹也 (pp.20-21, pp.31-34, pp.38-41)

描画

赤木あゆ子 (p.16)

印刷

中塾総合印刷株式会社



ミツカン水の文化センター



表紙：陽光きらめく海に
下ろした竿。釣り糸の先
に広がる水の世界を、釣
り人は想像しつづける
(撮影：葛西亜理沙/東京湾)

裏表紙上：己の気配を消して毛鉤を打ち込む。欺けるか、見
抜けるか。人と魚の知恵比べである(撮影：川本聖哉/山梨県・
小菅川)下：歌川国芳が鉄砲洲(てっぽうず)で釣りをする人々
を描いた浮世絵『東都名所 てっぽふづ』。鉄砲洲は今の
東京都中央区湊、明石町にあたる。地名の由来は、砂洲が
細長く鉄砲の形をしていたから、あるいは幕府がここで大砲を
試射したからともいわれる(中川船番所資料館蔵)